

伏見城跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一二―一七

伏見城跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

伏見城跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、宅地造成に伴う伏見城跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

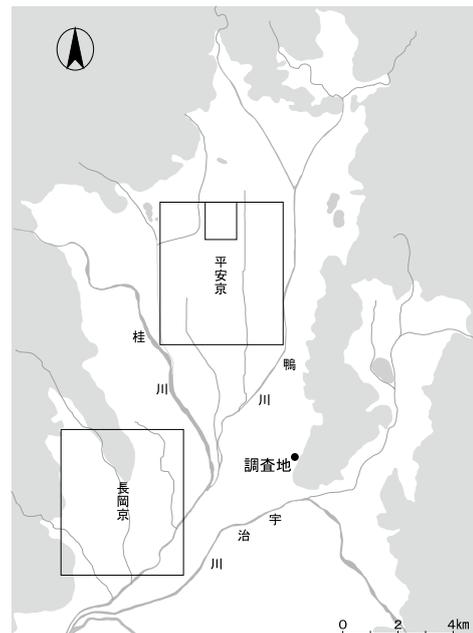
平成25年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 伏見城跡（文化財保護課番号 12 F 291）
- 2 調査所在地 京都市伏見区桃山町正宗15-1他 地内
- 3 委 託 者 小林建設株式会社 代表取締役社長 北川勝次
- 4 調査期間 2012年11月12日～2012年12月15日
- 5 調査面積 282㎡
- 6 調査担当者 モンペティ恭代
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「竹田」・「丹波橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 モンペティ恭代
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 15 協力者 調査・遺物整理にあたっては下記の方々から様々なご教示を頂きました。記して感謝いたします。（五十音順、敬称略）
荒木喜久子、池谷初恵、北垣聡一郎、高 正 龍、鈴木康之、三木善則、高田 徹、松尾信裕、村木二郎、森岡秀人、森島康雄

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 遺跡の位置と歴史的環境	3
(2) 周辺の調査	5
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 1区の遺構	8
(3) 2区の遺構	13
4. 遺 物	20
(1) 遺物の概要	20
(2) 土器類	20
(3) 瓦類	22
(4) その他の遺物	26
5. まとめ	27
(1) 土塁と整地層について	27
(2) 建物について	27
(3) 出土遺物について	27

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区全景（南東から）
		2	1区土塁15断割り断面（南から）
図版2	遺構	1	1区法面13・14（南西から）
		2	1区瓦列10（南東から）
		3	1区井戸2（西から）
図版3	遺構	1	2区全景（北西から）
		2	2区北壁断面（南東から）
図版4	遺構	1	2区建物1（北東から）
		2	建物1柱穴26断面（南東から）
		3	建物1柱穴64断面（南西から）

- 図版5 遺構 1 2区柱穴列76(北から)
 2 柱穴列76柱穴11(東から)
 3 柱穴列76柱穴13(南西から)
- 図版6 遺物 土器類・道具瓦
- 図版7 遺物 軒丸瓦
- 図版8 遺物 軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦

挿 図 目 次

図1	調査位置図(1:5,000)	1
図2	地形測量図および調査区配置図(1:500)	2
図3	1区調査前全景(南から)	3
図4	2区調査前全景(南東から)	3
図5	作業風景(北東から)	3
図6	周辺の調査地点および伏見城惣構えの遺構(1:8,000)	5
図7	基本層序模式柱状図	7
図8	1区遺構平面図(1:100)	9
図9	1区土塁15断面図1(1:50)	10
図10	1区土塁15断面図2(1:50)	11
図11	1区法面13・14断面図(1:50)	11
図12	1区南壁断面図(1:50)	11
図13	1区瓦列10実測図(1:20)	12
図14	2区遺構平面図(1:100)	14
図15	2区北壁断面図(1:80)	15
図16	2区建物1実測図1(1:50)	16
図17	2区建物1実測図2(1:50)	17
図18	2区建物1柱穴26・64実測図(1:20)	18
図19	2区柱穴列76実測図(1:50)	19
図20	出土土器実測図(1:4)	21
図21	出土瓦拓影・実測図1(1:4)	23
図22	出土瓦拓影・実測図2(1:4)	25
図23	出土石製品実測図(1:4)	26
図24	軒瓦葺き上げ状態復元(試案)	28

表 目 次

表1	関連年表	4
表2	周辺の調査一覧表	6
表3	遺構概要表	8
表4	遺物概要表	20

伏見城跡

1. 調査経過

今回の調査は、京都市伏見区桃山町正宗15-1他における宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査地は、伊達街道と上板橋通が交差する北東、JR奈良線の東側に位置している（図1）。当地は、周知の遺跡である伏見城跡にあたり、絵図や地名・文献史料などから、伊達政宗の伏見上屋敷とその北に築かれた伏見城惣構えの土塁があった場所と推定される。現地形からも、敷地の西北部に土塁の痕跡と見られる高まりを認めることができた。

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）による試掘調査では、伏見城期の整地層や土塁の内溝と考えられる溝を確認した。この成果を基に文化財保護課は、発掘調査の指導を行い、財団法人埋蔵文化財研究所が委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

調査は、文化財保護課の指導の下、斜面地に1区138㎡、平坦地に2区144㎡、合計282㎡を設定し（図2）、2012年11月12日から開始した。掘削には遺構面直上まで重機を用い、その後の遺構掘削および精査は人力によって行った。適宜、平面図・断面図など必要な図面の作成と写真撮影な

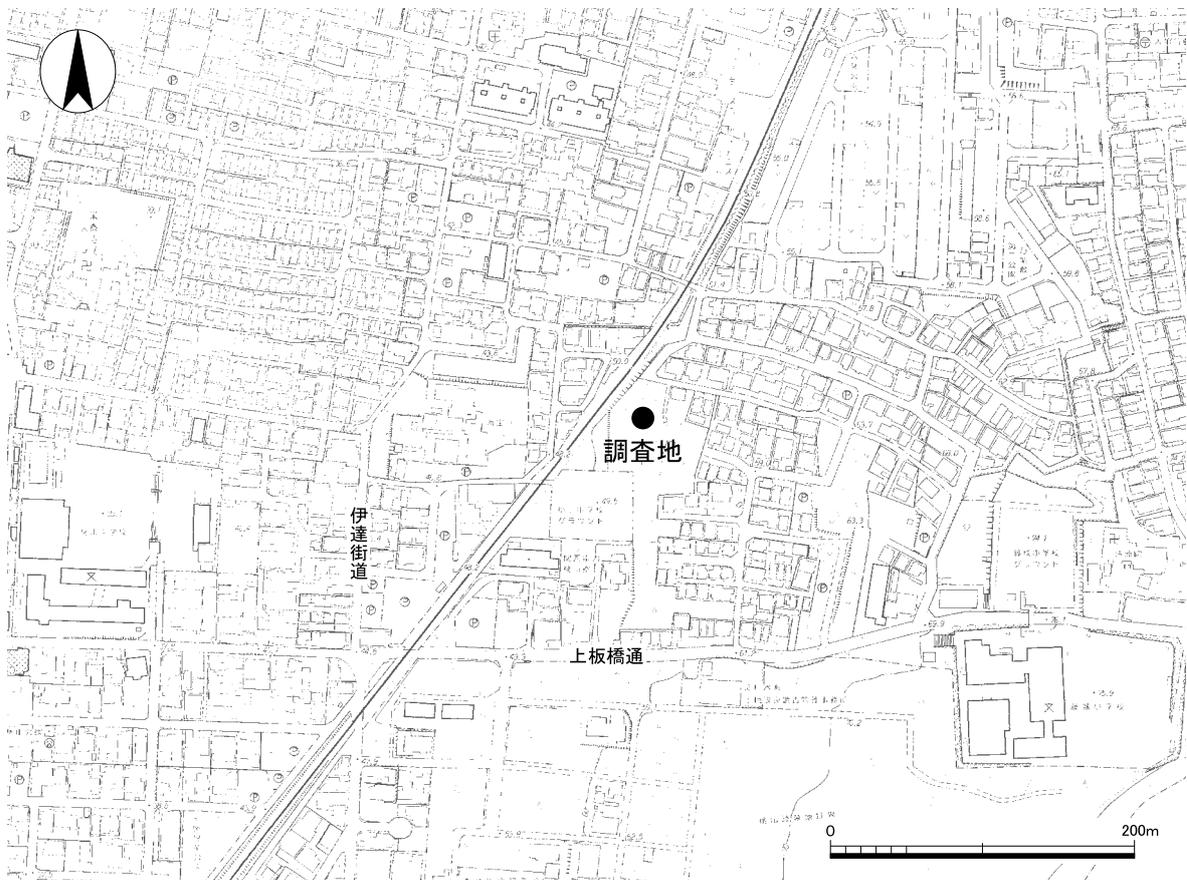


図1 調査位置図（1：5,000）

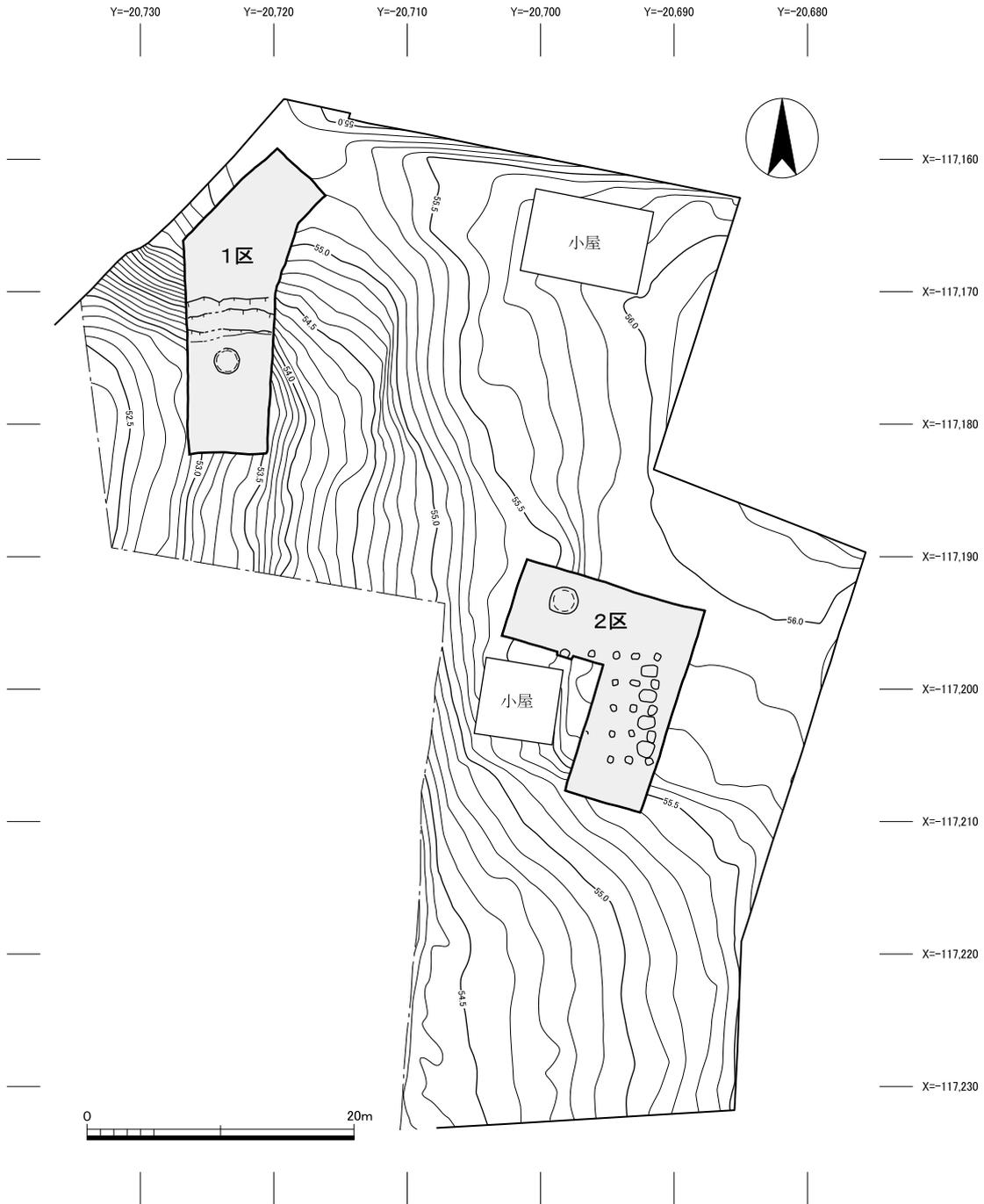


図2 地形測量図および調査区配置図（1：500）

どを実施した。調査の最終段階には、1区北半中央部と2区北壁を重機により断ち割り、土塁断面と整地層断面の状況を観察し、記録をとった。調査終了後は、柱穴には土嚢を詰めて養生し遺構面の保護を行い、12月15日に現場での作業をすべて終了した。

2. 位置と環境

(1) 遺跡の位置と歴史的環境 (表1)

調査地は、京都盆地東側を画する東山南端、桃山丘陵の西側斜面の中腹に立地する。地表面の標高は約52～56mで、北東から南西になだらかに下がる傾斜地である。

この丘陵西側斜面には、縄文土器の散布地である金森出雲遺跡や古墳時代の桃山古墳群（永井久太郎古墳）などの遺跡がある。南西にある御香宮神社境内周辺からは、奈良時代前期の瓦が出土しており、付近に寺院があったものと考えられている。

文禄元年（1594）、豊臣秀吉が指月の丘（現在の観月橋団地一帯）に城郭を構築した。当初は秀吉の隠居屋敷として造営され、規模はあまり大きくなかったとされるが、まもなく本格的な城郭へと改修される。ところがこの城は、慶長元年（1596）の大地震によって倒壊してしまう。秀吉は直ちに指月の丘北側の木幡山に大規模な城郭の再建を開始し、翌慶長2年（1597）には完成を果たしている。この城の本丸・天守閣は現在の明治天皇陵の位置にあたる。秀吉はこの城で慶長3年（1598）に没する。

秀吉の没後は、伏見城は実質的に徳川家康の支配下におかれ、慶長5年（1600）の関ヶ原の合戦の前哨戦でほとんどの建物が焼失してしまう。戦後まもなく家康による再建が始まり、整備される。慶長8年（1603）には家康はこの城において、征夷大將軍の宣下を受けている。元和元年（1615）大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡し、二条城が造営されたことにより、伏見城は城郭としての役割を終え、元和9年（1623）の徳川家光の三代將軍宣下を最後の行事として廃城となった。

その後の伏見は、城郭と大名屋敷はなくなったものの町人居住域は維持され、京都と大坂を結ぶ立地の重要性から、交通運輸の拠点として幕府の直轄地となり、江戸時代を通じ商業都市



図3 1区調査前全景（南から）



図4 2区調査前全景（南東から）



図5 作業風景（北東から）

表1 関連年表

和暦	西暦	豊臣／徳川	伊達正宗
天正18	1590	1月20日豊臣秀吉(54歳)、小田原参陣を命ず。7月5日小田原城落城。8月9日秀吉、黒川城に入り奥羽仕置を命じる。9月23日秀吉、聚楽第で茶会を催す。11月7日秀吉、聚楽第にて朝鮮使節と会見、国書を受ける。	6月5日政宗(24歳)、小田原攻めに遅参。同9日秀吉に初めて謁する。7月28日宇都宮において秀吉に謁する。奥羽仕置きにより、妻子の京都在住が命じられる。
天正19	1591	1月秀吉、御土居を築き始め、5月およそ完成。この年、寺町の造成が進む。12月27日、秀吉、関白職を甥豊臣秀次(23歳)に譲り、太閤となる。	閏1月27日、清洲において、秀吉に謁する。2月4日、京都に入る。同12日侍従に任ぜられ羽柴姓賜る。7月奥州一揆を鎮圧。9月岩出山城へ移る。
天正20 文禄元	1592	3月秀吉、唐津の名護屋城に出陣する。8月秀吉、伏見指月に新城の造営を始める。	2月13日京都の聚楽屋敷に着く。3月17日京都を発ち、名護屋へ出陣、派手な軍装で目を引く。4月名護屋へ着陣。
文禄2	1593	9月大仏殿上棟。閏9月秀吉、伏見の新屋敷に移る。	4月朝鮮へ渡り、晋州城攻撃などに参加し、これを落とす。9月帰国、同月聚楽第の屋敷へ入る。
文禄3	1594	1月伏見新屋敷を城郭へと改修。2月秀吉、吉野花見。3月伏見指月城の普請着工、淀城(納所城)を解体し、伏見に移す。8月伏見指月城完成し、秀吉、これに移る。この年、太閤堤の築造が進む。	2月秀吉の吉野花見に随行し歌会の席に列する。6月16日聚楽第にて長女五郎八姫誕生。
文禄4	1595	7月15日秀次、自刃(27歳)。7月28日秀吉、聚楽第の破却を命じる。	4月京都を発つ。7月15日岩出山に帰着。8月上旬、大坂に着く。秀次の件で秀吉に詰問される。8月24日秀吉に許される。
文禄5 慶長元	1596	閏7月13日大地震により伏見城など倒壊。閏7月14日木幡山に伏見城の再建を始める。10月10日伏見新城の本丸完成。	この年、伏見城修築の課役をつとめる。
慶長2	1597	1月20日伏見城増築開始。5月4日伏見城天守閣完成、秀吉・秀頼これに移る。	朝鮮出兵を免れる。冬、右近衛権少将に任じられる。
慶長3	1598	3月15日秀吉、醍醐の花見。8月18日秀吉、伏見城で没する(62歳)。	秀吉の遺品として鎬藤四郎の脇差を受ける。
慶長4	1599	閏3月13日徳川家康(56歳)、伏見城に移る。	正月五郎八姫と家康の六男松平忠輝の婚約が成立。
慶長5	1600	5月3日家康、上杉景勝の討伐を令する。8月1日西軍の攻撃により伏見城落城。9月15日家康、石田三成らの軍を関ヶ原に破る。	6月14日景勝を討つため大坂を発つ。7月25日景勝の白石城を落とす。9月下旬最上氏に援軍を出し、直江兼統の軍と戦わせる。12月24日仙台城の造営に着手。
慶長6	1601	3月15日伏見城再建が進み、家康、大坂より移る。	4月14日仙台城に移る。9月10日仙台を発ち、同30日伏見に着く。10月近江に5千石の地を安堵され、江戸屋敷と久喜の鷹場を与えられる。
慶長7	1602	5月家康、二条城の造営に着手。	10月上旬伏見を発ち、江戸に向かう。
慶長8	1603	2月12日家康、征夷大將軍となる。3月21日家康、新造の二条城に入る。	正月正室と五郎八姫、嗣子虎菊丸(忠宗)、伏見より江戸へ移る。8月、江戸を発ち仙台に着く。
慶長9	1604	8月14日秀吉七回忌、豊国神社臨時祭礼。	10月仙台より江戸に着く。
慶長10	1605	3月5日家康、伏見城で朝鮮使節と会見、和議を成立する。4月16日徳川秀忠(26歳)、伏見城にて將軍宣下を受ける。12月26日伏見城下に火災、大名屋敷などが多数焼亡。	2月16日秀忠の上洛の先駆として江戸を発つ。3月23日伏見に着く。4月26日秀忠に従って参内。5月29日京都を発つ。江戸を経て仙台に着く。
慶長11	1606	3月江戸城増築工事始まり、9月完成、秀忠、ここに移る。	12月24日五郎八姫、忠輝と結婚。
慶長12	1607	3月、畿内近国の大名に命じ伏見城の財宝や器物を駿府城に移送。閏4月江戸城天守台・石垣の修築を命じる。7月家康、駿府城に移る。9月江戸城天守台・大手門が完成。	閏4月江戸城堀普請を課される。
慶長13	1608		正月松平姓を許され、陸奥守に任じられる。
慶長15	1610	8月秀吉十三回忌、豊国神社臨時祭礼。	
慶長16	1611	3月豊臣秀頼(18歳)、二条城で家康と会見する。	4月虎菊丸と秀忠の養女振姫の婚約が成立。
慶長18	1613		9月15日支倉常長ら、月ノ浦を出帆。
慶長19	1614	10月1日家康、大坂討伐を発令(大坂冬の陣)。11月15日家康、京都を出陣、同日秀忠も伏見を出陣。12月20日大坂冬の陣、和睦。	10月10日仙台を発ち、江戸を経て11月10日京都に入る。11月29日仙波に布陣し、大坂城を攻める。12月28日長子秀宗宇和島10万石の大名となる。
慶長20 元和元	1615	3月家康、駿府で政宗に謁見。4月、家康、再び大坂討伐を発令(大坂夏の陣)。5月5日家康・秀忠、大坂へ出陣。5月8日大坂城落城、豊臣氏滅亡。	正月23日、大坂城垣堀の普請を終え、京都に入る。3月、京都を発ち、駿府を経て江戸に着く。4月9日江戸を発ち、同21日京都に入る。4月28日京都から出陣。5月6～7日大坂方と合戦。7月23日京都を発ち、江戸を経て仙台に着く。
元和2	1616	4月家康、駿府で没す(75歳)。	2月、駿府の家康を見舞う。
元和3	1617	7月7日秀忠、伏見城で諸大名・公家を饗応。8月13日ポルトガル人、伏見城で秀忠に謁見。	6月6日將軍家忠上洛の共奉として、京都に着く。9月京都を発つ。江戸を経て、12月仙台へ帰着。12月13日、忠宗、振姫と結婚。
元和5	1619	2月伏見町人の本格的な大坂移住始まる。	4月26日將軍秀忠上洛の先駆として江戸を発つ。5月16日京都に着く。9月28日京都を発ち、江戸に着く。
元和9	1623	7月27日徳川家光(19歳)、伏見城にて將軍宣下を受ける。閏8月20日幕府、伏見城天守閣の廢材による新淀城造営を命じる。	5月16日秀忠・家光上洛の先駆として江戸を発つ。6月8日京都に着く。9月3日京都を発ち、江戸に着く。

として発展を果たした。

伏見城城下町は丘陵西麓を中心に町割が行われ、堀と土塁からなる惣構えで囲まれていた。惣構えは文禄3年(1594)秋には完成していたとされる。あわせて伏見港の整備や宇治川・巨椋池の改修も行われた。城下町には武家屋敷が多数造営され、有力大名の屋敷は城郭周辺に集められた。町人の居住区は京町通、両替町通を中心に配置され、その西側には寺社が配置された。伏見城と城下町に関しては、近世に入って多くの絵画史料(絵図)が描かれている。現代の地図と絵図を重ね合わせると、調査地はほとんどの絵図に「仙臺中納言正(ママ)宗」の名が記されている。地名からも測り知れることでもあるが、調査地は伊達政宗の伏見上屋敷が想定される場所である。表1に伊達政宗と伏見城との関連を年表にまとめた²⁾。

調査地周辺には現代でも惣構えの土塁と堀の段差は住宅地の中に確認することができ、山田邦和氏は現代の地図上に土塁と堀を重ねた図を作成している³⁾。それによると、調査地1区に現認できる斜面は基底部の幅約18mはある土塁の南斜面にあたる。

(2) 周辺の調査 (図6、表2)

伏見城跡では、これまでに多くの発掘・立会調査が行われている。今回の調査地点に近接する主要な調査の概要としては、深草大亀谷・六躰町・万帖敷町での調査(図6-4)では、江戸時代の

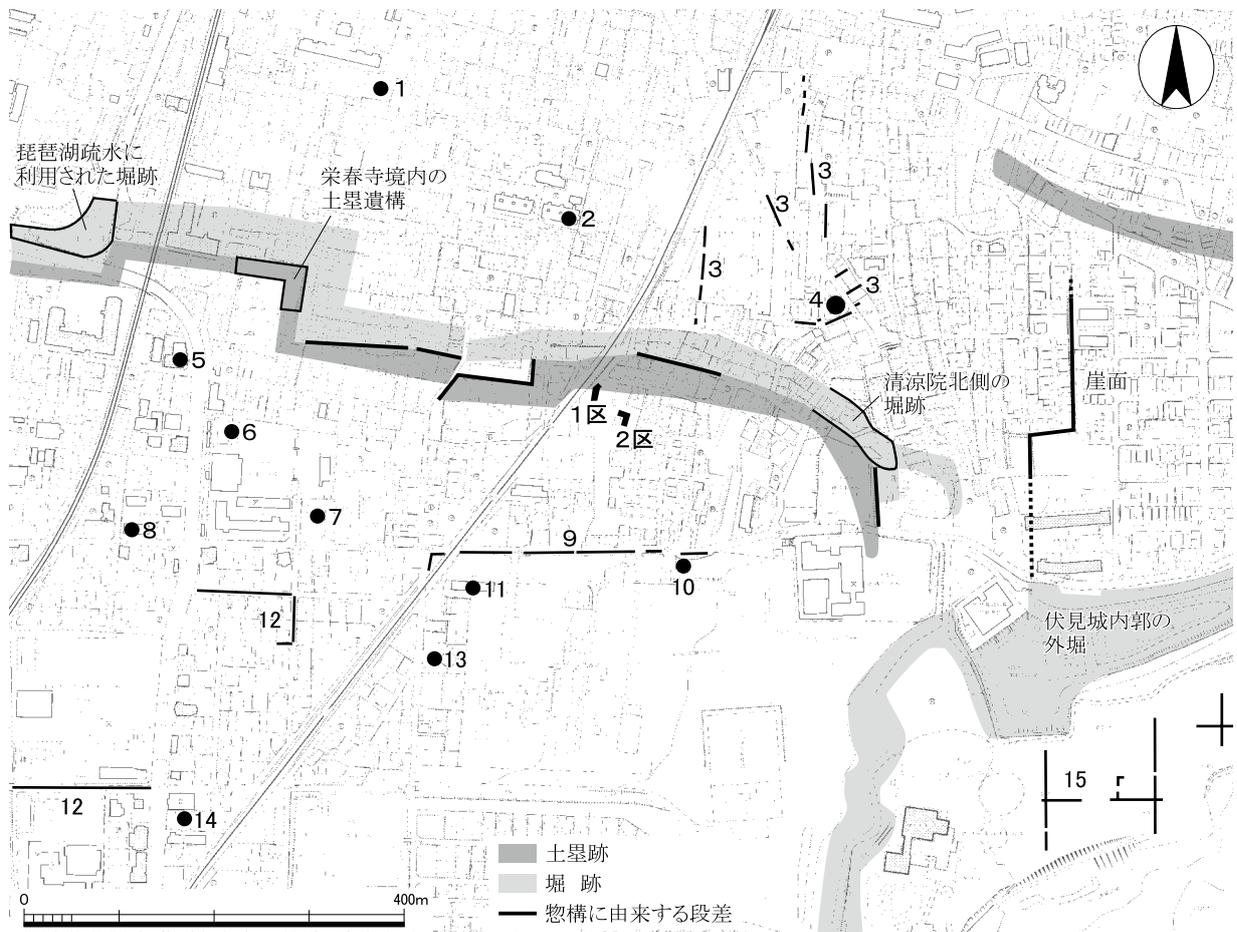


図6 周辺の調査地点および伏見城惣構えの遺構 (1 : 8,000)

表2 周辺の調査一覧表

No.	所在地	調査方法	調査年月日	検出遺構	出土遺物	文献
1	深草中ノ島町17	発掘	2006.10.10～11.11	伏見城期の堀状遺構・土取り穴・土坑・石列など。	伏見城期の土師器・施釉陶器・瓦類。	『伏見城跡発掘調査報告書-京都市伏見区深草中ノ島町の調査-』2007
2	深草内膳町10-1	試掘	1995.10.23, 11.10～11	伏見城期の南北溝・南北石列など。	伏見城期の土師器、施釉陶器、巴文軒丸瓦など。	『京都市内遺跡試掘調査概報平成7年度』1996
3	深草大亀谷・六躰町・万帖敷町	試掘	2001.9.28～11.26	桃山時代から江戸時代の町屋跡・地山を削り出した段。	桃山時代から江戸時代の土師器、陶磁器、瓦類など。	『平成13年度京都市埋蔵文化財調査概要』2004
4	深草大亀谷・六躰町・万帖敷町	発掘	2002.5.8～7.30	江戸時代前期の路面・建物・礎石・水溜・土坑、後期の路面・建物・礎石・溝・水溜・土坑など。	江戸時代の土師器・施釉陶器・焼締陶器・瓦器など。	『伏見城跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-11』2002
5	桃山最上町37-1他	試掘	1992.11.30	桃山時代の土坑。	桃山時代の土師器・施釉陶器など。	『京都市内遺跡試掘調査概報平成4年度』1993
6	桃山水野左近東町19	試掘	2004.11.1～5	桃山時代とみられる整地土層。	桃山時代の瓦類、江戸時代の陶磁器。	『平成16年度財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』2006
7	桃山水野左近東町19	立会	1982.2.1	表土下-0.1～0.4mで伏見城期の遺構面。	桃山時代の瓦類。	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報昭和56年度』1982
8	桃山水野左近東町69	発掘	1977.4.13～6.6	桃山時代から江戸時代の土坑・井戸・溝など。	土師器・施釉陶器・金属製品・瓦類(焼変を受けた瓦・金箔瓦・水野氏の「沢瀉文」や黒田氏の「餅文」を紋様にした軒丸瓦など)。	『伏見城跡発掘調査概報(水野左近東町)-大名屋敷推定地区-』1977
9	桃山町永井久太郎他地内市道上板橋通	発掘	1998.7.6～1999.3.19	桃山時代から江戸時代の東西石垣・石組溝・南北石組・犬走り・路面・溝など。	古墳時代の埴輪・須恵器、桃山時代から江戸時代の土師器・陶器・銭貨・石仏・瓦類(金箔瓦・「笹文」を紋様にした軒平瓦など)。	『平成10年度京都市埋蔵文化財調査概要』2000
10	桃山町永井久太郎56	発掘	1986.12.1～1987.1.16	桃山時代から江戸時代の礎石建物・井戸・溝・柱穴・土坑など。	古墳時代の埴輪・須恵器、桃山時代から江戸時代の土師器・陶器・瓦類・鉄製品。	『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』1989
11	桃山町永井久太郎	発掘	1978.10.5～12.5	古墳の埴丘、伏見城期の井戸・瓦溜、江戸時代の礎石建物・墓壇など。	古墳時代の土師器・須恵器・埴輪、伏見城期の金箔瓦、江戸時代の土師器・銭貨・骨片など。	『昭和53年度京都市埋蔵文化財調査概要』2011
12	桃山水野左近西町～井伊掃部東町他	立会	1983.5.30～7.26	桃山時代の東西溝・東西石組溝。	桃山時代の瓦類。	『昭和58年度京都市埋蔵文化財調査概要』1985
13	桃山町永井久太郎59-2	試掘 発掘	1988.11.21～12.10	桃山時代の南北石組溝・築地・犬走り・路面・礎石建物など。	桃山時代の土師器・陶器・炭化した米・鉄製品・弾丸など。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和63年度』1989 『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』1993
14	桃山福島大夫西町1-2	発掘	2007.9.25～11.28	桃山時代の石組側溝・石垣基礎・礎石土坑・柵列など。	桃山時代の土師器・施釉陶器・焼締陶器・輸入陶器・銭貨・瓦類(佐竹氏の「扇に月丸文」を紋様にした軒丸瓦など)。	『伏見城跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-10』2008
15	桃山町大蔵地内	試掘	2004.5.6～7.13	桃山時代の土坑・堀・落込・柱穴など。	桃山時代の土師器、陶器、瓦類。	『平成16年度財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』2006

路面や町屋跡などを検出し、一間道とそれに面する宅地・建物を明らかにした。市道上板橋通での調査(図6-9)では、伊達街道の交差点から東へ延びる桃山時代から江戸時代の路面・側溝・犬走り・石垣などを検出、金箔瓦などが出土した。桃山町永井久太郎での調査(図6-13)では、伊達街道の桃山時代の路面・側溝・犬走りと武家屋敷跡などを検出、土器類の他、鉄製品や、弾丸、炭化したおにぎり状の炊米などが出土した。

なお、主な調査成果については図6、表2にまとめた。

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図7)

調査対象地の北側には惣構えの土塁が想定されており、この南斜面に設けた1区は傾斜が顕著で、北端と南端の標高差は現地表面で約2.4mある。2区は屋敷地内と考えられ、現地表面での標高差は東で約0.5m高い程度で比較的平坦である。

1区の基本層序 北端では、現地表面から厚さ約0.1mの表土層を除去すると、伏見城惣構えの土塁(標高55.1m)構築土となる。中央部では、現地表面から約0.3mまでが表土および旧耕作土層で、これを除去すると、土塁(標高53.94m)の構築土となる。その下層には地山直上に薄く、明黄褐色細砂~シルトの化粧土を施して作られた平坦面がある。この平坦面の標高は51.75mで、ここでの土塁構築土の厚さは約2.2mある。南東部では現地表面から厚さ0.8~1.2mの表土および旧耕作土層を除去すると、伏見城期の整地層が約0.45mの厚さであり、その下層は地山となる。この地点の地山の標高は約52.2mである。

2区の基本層序 西側では、現地表面から厚さ約0.65mの表土および旧耕作土層を除去すると、伏見城期の遺構面となる。その下層には整地層が0.9~1.0mの厚さで盛られており、その下は地山である。この地点の地山の標高は約53.95mである。地山面は東側では全体的に約0.5m高い。

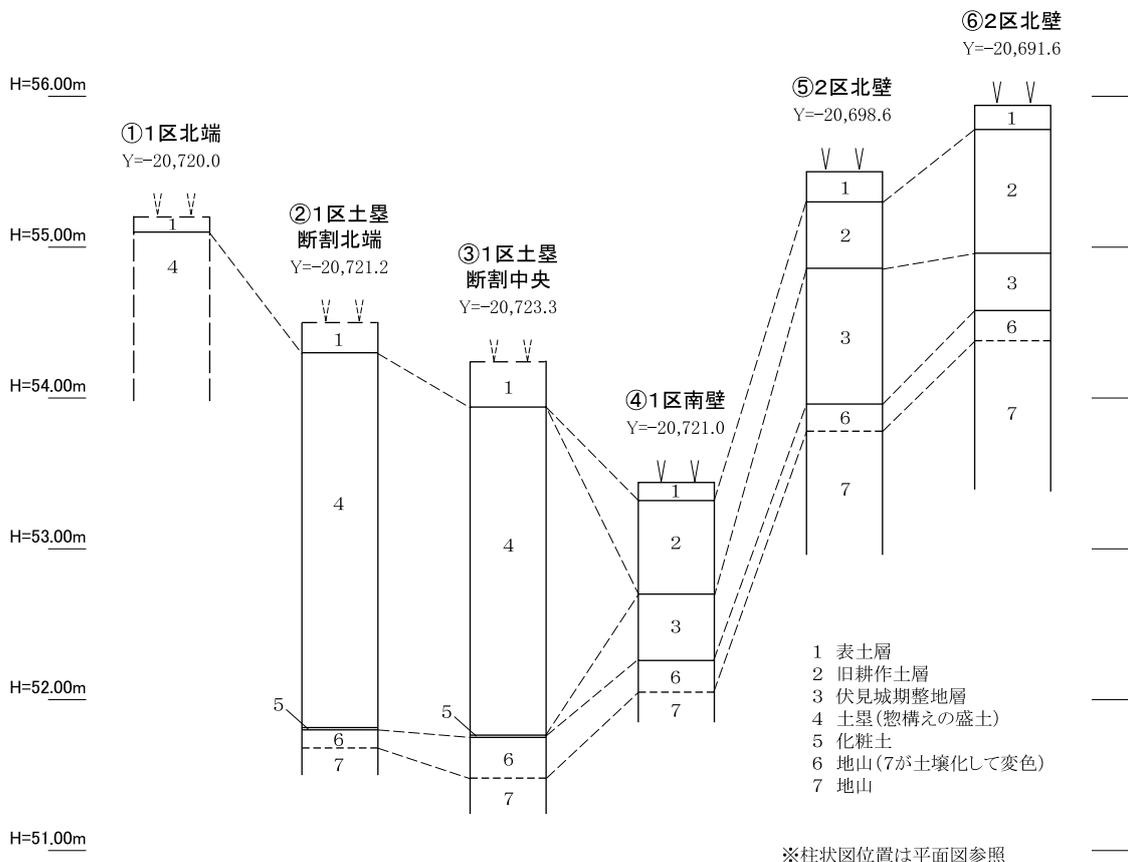


図7 基本層序模式柱状図

(2) 1区の遺構 (図8～13、図版1～2)

1区では、近世から現代の耕作により攪乱されていたものの、南部では、伏見城期に桃山丘陵西斜面を整地し、ひな壇造成した盛土の法面と平坦面を良好に検出した。調査区北部では現地地表下約0.1mで、伏見城期の土塁を検出した。また、調査区中央部では、井戸を検出した。以下、主要な遺構について述べる。

土坑7 旧耕作により攪乱を受けていたが、調査区南西部で検出した。検出面での規模は、南北0.55m、東西0.4mの楕円形、深さ0.1mで、底部に径3～5cmの礫を密に詰める。柱穴の壺掘り地業に伴うぐり石の可能性はあるが、他に並びは認められない。

溝6 調査区中央部で検出した東西方向の溝である。幅0.5m、深さ0.3m。Y=-20,723付近で途切れる。底部の標高は東端が51.92m、西端が51.57mである。埋土は大きく2層に分かれ、上層で明黄褐色砂泥、下層で褐色砂泥が堆積する。土塁の落ち込む地点に位置することから、土塁内溝と考えられる。

溝9 調査区中央南寄りで検出した北西から南東方向の溝である。幅は最大で0.9m、深さは0.3mである。X=-117,178付近で途切れるが、南側で溝11を検出しており一体のものと考え、整地層13の斜面下の水切り溝となる可能性も考えられる。

溝11 調査区南端で検出した南北方向の溝である。検出面での幅0.3m、深さ0.07m。X=-117,181付近で途切れる。上面はかなり削平を受けているが、北側で検出した溝9とつながる可能性がある。

井戸2 (図版2) 調査区中央南寄りで検出した。掘形は円形で、径約1.9mの素掘りの井戸である。検出面から深さ2.1m(標高49.8m)まで掘り下げたが、底面まで到達せず、作業の安全対策上、掘り止めた。埋土は礫を多く含む褐色系砂泥で、多量の伏見城期の瓦のほか、京都X期新段階～XI期中段階に属する土器が少量出土した。

土塁15 (図9・10、図版1) 伏見城惣構えを形成する東西土塁の南斜面である。表面は木の根などで大きく攪乱を受けているものの、褐色～明褐色砂泥に直径2～3cmの礫と直径1～3cmの粘土塊を含む土で固く締められていた。土塁上面はX=-117,168.5付近で急激に下がり、地山上面に落ち込む。この標高は約51.8mであり、検出した土塁最上部との高低差は3.3mとなる。裾部斜面の傾斜角は約45度である。

表3 遺構概要表

時代	1区遺構	2区遺構
伏見城期 文禄元年(1592)築城～ 元和9年(1623)廃城	土坑7、溝6・9・11、井戸2、 土塁15、法面13・14、瓦列10	土坑2・91、建物1、柱穴列76、井戸 75、整地層
近世～近代	耕作溝、盛土	

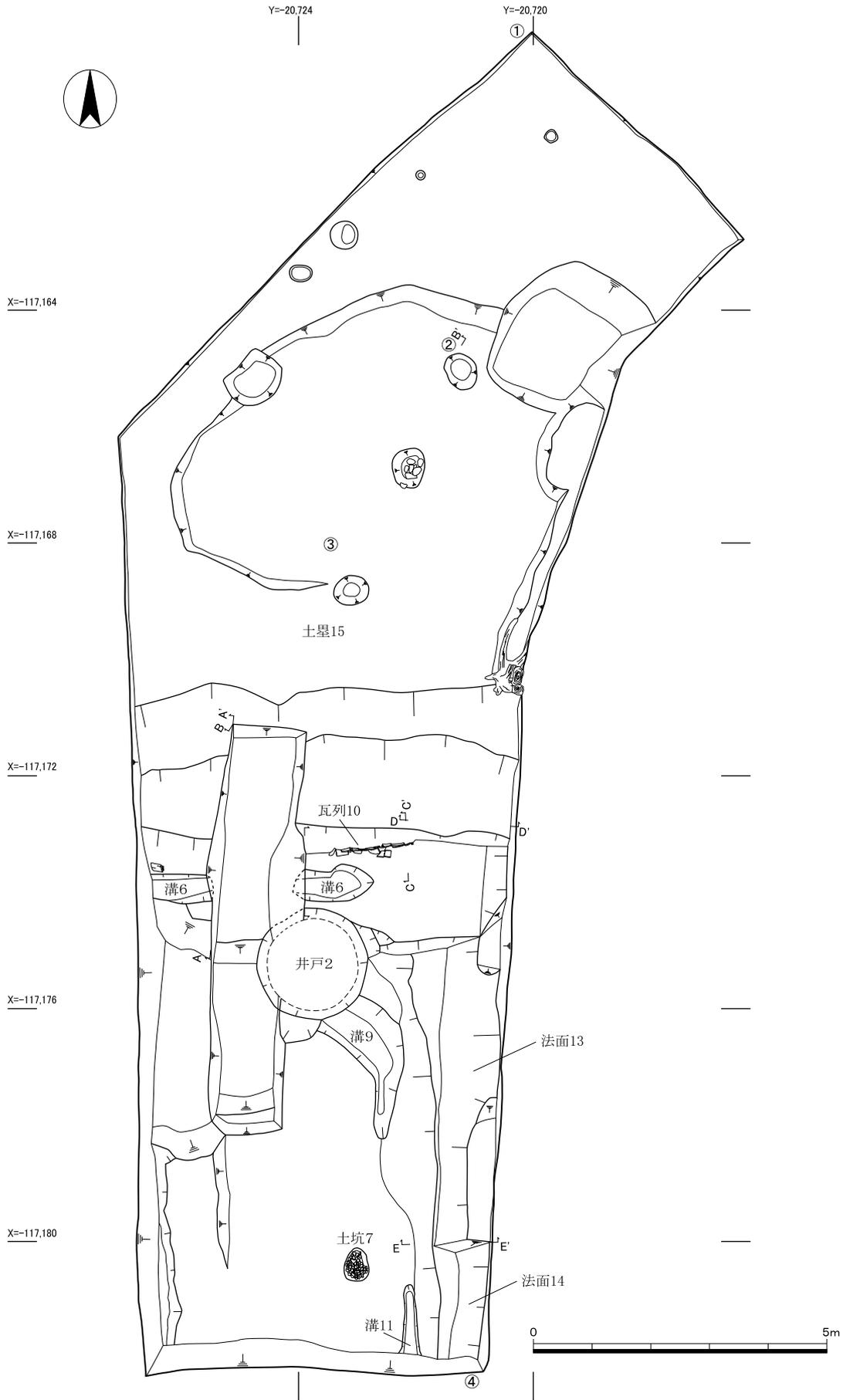
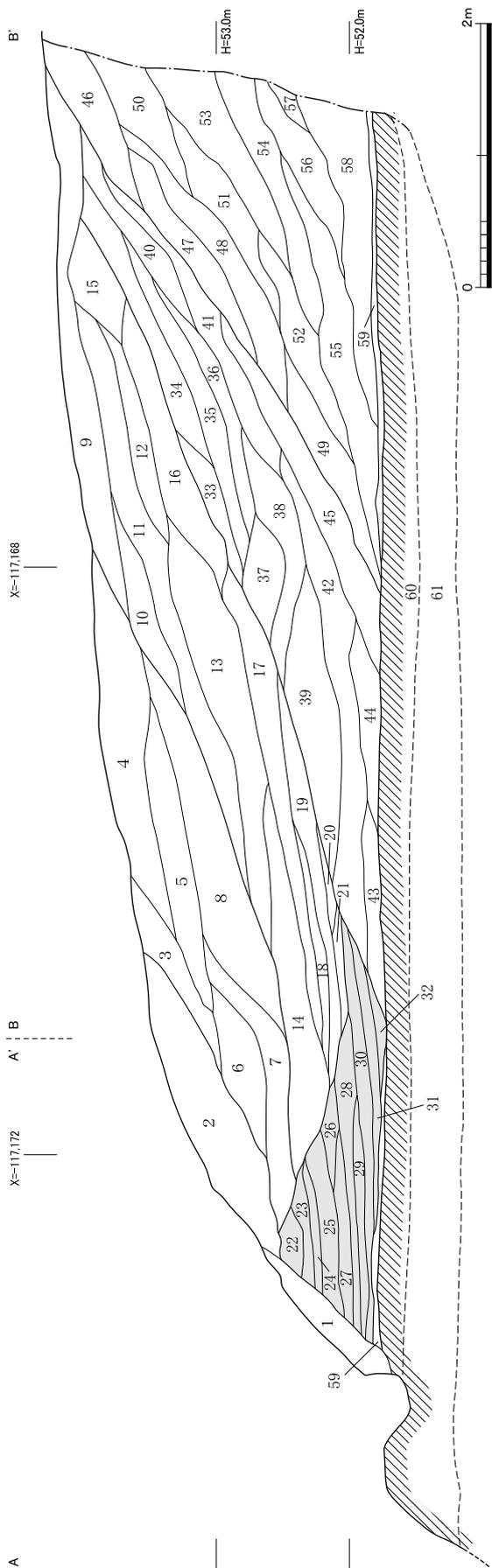
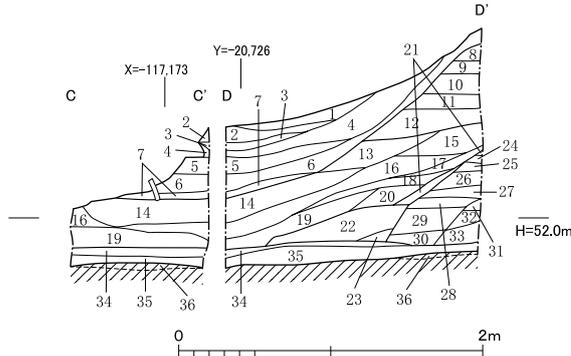


图8 1区遺構平面図 (1 : 100)



- 1 5YR5/6明赤褐色砂泥 径2~3cmの礫を含む(法面に貼付ける)
- 2 2.5YR4/6赤褐色粘質土(礫地土)
- 3 10YR5/8黄褐色砂泥に10YR7/1灰白色粘土径1~2cmを含む 固く締まる
- 4 10YR4/6褐色砂泥に2.5YR6/3にぶい黄色粘土径1~2cmを多く含む 固く締まる
- 5 10YR6/6明黄褐色砂泥 径2~3cmの礫を含む 2.5Y6/3にぶい黄褐色粘土径2~5cmを多く含む 固く締まる
- 6 2.5Y5/5黄褐色砂泥 2.5Y6/3にぶい黄色粘土径2~5cmを多く含む 径2~3cmの礫を含む 固く締まる
- 7 2.5Y6/8明黄褐色砂泥 2.5Y6/3にぶい黄色粘土径2~5cmを多く含む 径2~3cmの礫を含む 固く締まる
- 8 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
- 9 7.5YR5/8明褐色砂泥 10YR7/2灰白色粘土径1~3cmを多く含む 径2~3cmの礫を含む 固く締まる
- 10 10YR5/8黄褐色砂泥 2.5Y6/3にぶい黄色粘土径2~5cmを少量含む
- 11 10YR6/8明黄褐色砂泥 5Y7/1灰白色粘土径5~8cmを多く含む
- 12 2.5Y6/8明黄褐色砂泥 5Y7/1灰白色粘土径1~3cmを多く含む
- 13 10YR5/6黄褐色砂泥 2.5Y7/2灰黄色粘土径2~3cmをまばらに含む
- 14 10YR4/6褐色砂泥 10YR7/1灰白色粘土径1~8cmをまばらに含む
- 15 10YR6/8明黄褐色砂泥 10YR7/4にぶい黄褐色粘土径1~3cmを多く含む
- 16 10YR5/8明黄褐色砂泥
- 17 2.5Y4/6オリーブ褐色砂 径1~2cmの礫を含む
- 18 10YR6/6明黄褐色砂 径2~3cmの礫を含む
- 19 10YR5/8黄褐色砂泥 径2~5cmの礫を含む
- 20 10YR6/6明黄褐色砂泥 小礫を含む
- 21 2.5Y5/6黄褐色砂 径1cmの礫を少量含む
- 22 10YR7/6明黄褐色砂泥 2.5Y7/6明黄褐色粘土径2~3cmを少量含む 固く締まる
- 23 10YR6/6明黄褐色砂泥 径1~2cmの礫を含む
- 24 10YR7/4にぶい黄褐色砂 径1~2cmの礫を含む
- 25 10YR6/3にぶい黄褐色砂 径1~2cmの礫を含む
- 26 10YR5/6明黄褐色粗砂
- 27 10YR6/6明黄褐色砂泥 10YR7/6明黄褐色粘土径1~5cmをまばらに含む
- 28 7.5YR5/6明黄褐色砂泥
- 29 10YR5/6黄褐色砂泥 2.5Y7/2灰黄色粘土をまばらに含む
- 30 10YR6/6明黄褐色砂泥
- 31 2.5Y6/6明黄褐色砂泥
- 32 2.5Y5/6明黄褐色砂泥 2.5Y6/2灰黄色粘土が混ざる
- 33 2.5Y6/8明黄褐色砂泥 2.5Y7/1灰白色粘土径3~5cmを多く含む 固く締まる
- 34 10YR6/8明黄褐色砂泥
- 35 7.5YR6/6褐色砂泥
- 36 10YR5/8黄褐色砂泥 礫-粘土を少量含む
- 37 2.5Y5/6黄褐色砂泥 径5~10cmの礫を含む 2.5Y6/2灰黄褐色粘土径5~8cmを含む
- 38 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥
- 39 2.5Y6/8明黄褐色砂泥粘質 7.5YR5/8明褐色砂泥と2.5Y7/1灰白色粘土径5~8cmを含む
- 40 2.5Y6/8明黄褐色砂泥
- 41 2.5Y6/6明黄褐色砂泥 2.5Y7/1灰白色粘土径3~5cmを少量含む
- 42 2.5Y6/2灰黄色粘土径8~10cmと10YR6/8明黄褐色砂泥(粘質)が混ざる
- 43 2.5Y7/2灰黄色粘土と10YR6/8明黄褐色粘土が混ざる
- 44 7.5YR5/8明褐色砂泥と2.5Y7/2灰黄色粘土が混ざる
- 45 2.5Y7/1灰白色粘土ブロックの間に10YR5/8黄褐色粗砂が混ざる
- 46 10YR5/8黄褐色砂泥 径1~2cmの礫を少量含む
- 47 10YR5/8黄褐色砂泥 径2~3cmの礫を含む
- 48 10YR5/6黄褐色砂泥 径0.5~1cmの礫を含む
- 49 10YR6/8明黄褐色砂泥 径2~4cmの礫を含む
- 50 10YR4/6褐色砂泥
- 51 7.5YR4/6褐色砂泥
- 52 7.5YR3/4暗褐色砂泥
- 53 10YR5/8黄褐色砂泥 径1~2cmの礫をまばらに含む
- 54 10YR6/8明黄褐色砂泥
- 55 7.5YR4/6褐色砂泥 径2~5cmの礫を含む
- 56 7.5YR4/4褐色砂泥
- 57 7.5YR4/6褐色砂泥
- 58 7.5YR5/6明褐色砂泥
- 59 2.5Y6/6明黄褐色細砂~シルト(化粧土)
- 60 5YR3/6暗赤褐色粘質土(地山)61が土壌化して変色
- 61 5YR4/8赤褐色粘質土(地山)

図9 1区土層15断面図1 (1:50)

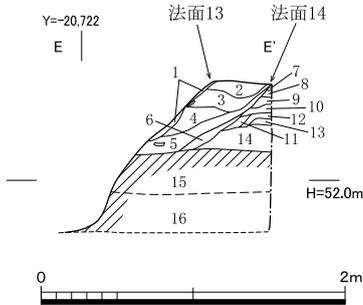


- 1 10YR7/8黄橙色シルト 10YR8/3浅黄橙色粘土ブロックを含む
- 2 5YR4/6赤褐色砂泥(やや粘質) 小礫が混ざる
- 3 10YR6/8明黄褐色砂泥(粘質) 小礫が混ざる
- 4 7.5YR4/6褐色砂泥(やや粘質) 径0.1~3cmの礫を少量含む
- 5 7.5YR5/8明褐色砂泥 細砂が混ざる 径1~4cmの礫を少量含む
- 6 5YR5/8明赤褐色砂泥(粘質)
- 7 7.5YR5/8明褐色砂泥 細砂が混ざる 径1~4cmの礫を微量含む
- 8 5YR4/8赤褐色砂泥(シルト質) 粗砂・小礫が混ざる
- 9 5YR6/6橙色砂泥(やや粘質) 5YR8/4淡橙色砂泥と径1~3cmの礫を含む

- 10 5YR4/8赤褐色砂泥(粘質) 7.5YR5/6明褐色粗砂を帯状に含む
- 11 5YR4/6赤褐色砂泥(粘質) 粗砂が混ざる
- 12 5YR4/8明赤褐色砂泥 粗砂が混ざる 7.5YR5/8明褐色砂泥(粘質)を含む
- 13 7.5YR4/6褐色砂泥 粗砂が混ざる 径1~3cmの礫を微量含む
- 14 5YR5/8明赤褐色砂泥(やや粘質) 粗砂が混ざる
- 15 5YR5/8明赤褐色砂泥(やや粘質) 粗砂が混ざる
- 16 5YR5/6明赤褐色砂泥(粘質) 径1~3cmの礫を少量含む
- 17 7.5YR4/6褐色砂泥 小礫が混ざる
- 18 7.5YR4/6褐色粗砂 径1~3cmの礫を多量に含む
- 19 7.5YR5/8明褐色粗砂 径0.5~4cmの礫を多量に含む
- 20 7.5YR5/8明褐色細砂~粗砂 径1~2cmの礫を多量に含む
- 21 7.5YR6/8橙色細砂~粗砂(化粧土)
- 22 7.5YR4/4褐色シルト 粗砂が混ざる 径1~6cmの礫を多量に含む
- 23 7.5YR6/8橙色シルト~細砂
- 24 7.5YR4/4褐色砂泥(粘質) 径1~2cmの礫を少量含む
- 25 7.5YR5/8明褐色粘質土 粗砂が混ざる
- 26 7.5YR4/3褐色粘質土 粗砂が混ざる 径1~3cmの礫を少量含む
- 27 7.5YR4/6褐色粘質土 径1~3cmの礫を少量含む
- 28 5YR5/6明赤褐色砂泥(やや粘質) 粗砂が混ざる
- 29 5YR4/4にぶい赤褐色シルト 径1~5cmの礫を少量含む
- 30 10YR6/8明黄褐色粘質土 粗砂が混ざる
- 31 10YR5/8黄褐色細砂 粘質土が混ざる 径1~3cmの礫を少量含む
- 32 7.5YR5/6明黄色粘質土 粗砂と10YR6/8明黄褐色粘質土が混ざる
- 33 7.5YR5/8明褐色粘質土 7.5YR4/3褐色粘質土と2.5Y7/8黄色細砂を含む 固く締まる
- 34 2.5YR6/6明黄褐色細砂~シルト
- 35 10YR7/8黄褐色細砂~シルト 10YR7/3にぶい黄褐色細砂~シルトが混ざる
- 36 5YR3/6暗赤褐色粘質土(地山)

※ 各断面の位置は図8に明示した

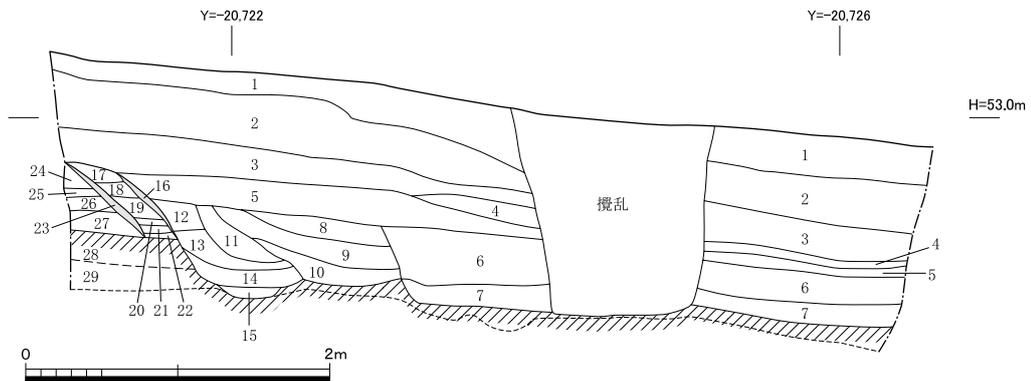
図10 1区土塁15断面図2 (1:50)



- 1 7.5YR6/8橙色細砂~粗砂(化粧土)
- 2 7.5YR4/6褐色砂泥 粗砂が混ざる 径1~2cmの礫を少量含む 固く締まる
- 3 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 粗砂が混ざる 炭を微量含む
- 4 7.5YR4/4褐色砂泥 粗砂が混ざる 径2~5cmの礫を少量含む
- 5 10YR5/8黄褐色粘質土 径1~5cmの礫を少量含む
- 6 5YR4/6赤褐色細砂~粗砂(化粧土)
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(やや粘質) 径1~6cmの礫を少量含む 固く締まる
- 8 10YR5/8黄褐色細砂 粘質土が混ざる 径1~3cmの礫を少量含む
- 9 7.5YR5/6明黄色粘質土 粗砂と10YR6/8明黄褐色粘質土が混ざる
- 10 7.5YR4/6褐色砂泥 径1~2cmの礫を含む 7.5YR5/4にぶい褐色粘質土が混ざる
- 11 7.5YR6/8橙色砂泥(粘質)
- 12 7.5YR4/3褐色粘質土 径3cmの礫を含む
- 13 7.5YR5/8明褐色砂泥 粗砂が混ざる
- 14 7.5YR5/8明褐色粘質土 7.5YR4/3褐色粘質土と2.5Y7/8黄色細砂ブロックを含む 固く締まる
- 15 5YR3/6暗赤褐色粘質土(地山) 16が土壌化して変色
- 16 5YR4/8赤褐色粘質土(地山)

※ 断面の位置は図8に明示した

図11 1区法面13・14断面図 (1:50)



- 1 表土層
- 2 10YR4/6褐色砂泥(粘質) 径1~4cmの礫を少量含む
- 3 10YR5/6黄褐色砂泥(粘質)
- 4 7.5YR5/6明褐色粘質土 径1~3cmの礫を微量含む
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(やや粘質) 径1~6cmの礫を少量含む
- 6 7.5YR4/6褐色粘質土 径1~3cmの礫を少量含む
- 7 7.5YR4/4褐色砂泥(やや粘質) 径1~2cmの礫を微量含む
- 8 10YR4/6褐色砂泥 粗砂が混ざる 径0.5~1cmの礫を少量含む
- 9 7.5YR5/6明褐色砂泥 粗砂が混ざる 径1~2cmの礫を少量含む
- 10 7.5YR4/4褐色砂泥(やや粘質)
- 11 10YR5/8明褐色砂泥 粗砂が混ざる 径1~3cmの礫を少量含む
- 12 7.5YR5/8明褐色砂泥 粗砂が混ざる
- 13 5YR5/8赤褐色砂泥(やや粘質) 径1~2cmの礫を少量含む
- 14 5YR4/4にぶい赤褐色粘質土
- 15 5YR3/2暗赤褐色粘質土(溝11)

- 16 7.5YR6/8橙色細砂~粗砂(化粧土)
- 17 7.5YR4/6褐色砂泥 粗砂が混ざる 径1~2cmの礫を少量含む 固く締まる
- 18 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 粗砂が混ざる 炭を微量含む
- 19 7.5YR4/4褐色砂泥 粗砂が混ざる 径2~5cmの礫を少量含む
- 20 5YR4/8赤褐色粘質土
- 21 10YR5/8黄褐色粘質土 径0.5~1cmの礫を少量含む
- 22 10YR6/8明黄褐色粘質土 粗砂が混ざる
- 23 5YR4/6赤褐色細砂~粗砂(化粧土)
- 24 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(やや粘質) 径1~6cmの礫を少量含む 固く締まる
- 25 10YR5/8黄褐色細砂 粘質土が混ざる 径1~3cmの礫を少量含む
- 26 7.5YR5/6明黄色粘質土 粗砂と10YR6/8明黄褐色粘質土が混ざる
- 27 7.5YR5/8明褐色粘質土 7.5YR4/3褐色粘質土と2.5Y7/8黄色細砂ブロックを含む 固く締まる
- 28 5YR3/6暗赤褐色粘質土(地山) 29が土壌化して変色
- 29 5YR4/8赤褐色粘質土(地山)

図12 1区南壁断面図 (1:50)

土塁は地山上に明黄褐色細砂を薄く敷いて化粧を施した上に構築されていることがわかった。断面観察から、土塁はその中心部を高く盛り上げ、その南斜面に砂泥層と砂礫層を互層に重ねて約1mの厚さを単位として数回に分けて斜め積みになっている。裾部に近づくと、先に裾部を版築工法で土手を造り（図9の網掛け部分）、その後、間を埋めて形状を整えていく状況が認められた。版築で造られた南面土手の傾斜角は約45度で、外面には礫を含む土が固く貼りつけられる。土塁斜面の仕上げは整地土層と同じ赤褐色粘質土で表面を形成する。

なお、屋敷内のひな壇造成の段が土塁本体の下に潜り込んでおり、屋敷地のひな壇造成を行った後に土塁を構築していることが判明した。ただ、土塁裾部の化粧土である明黄褐色細砂～シルトは、ひな壇造成土の下にも及んでいることから、ひな壇造成と土塁の構築は一連の工程で行われたと考えられる。

法面13（図11・12、図版2） 宅地内をひな壇造成した段の法面部分である。非常に固く締まる斜面で、傾斜角は40～45度である。この斜面は途中、近代の溝による攪乱を受けながらも、北へ続き、土塁15の下層へと潜りこむ。断割り断面の観察で、この整地層は平坦に均された地山上に4層以上の土を積み、固く締める。法面は橙色細砂で化粧されている。平坦に均された地山面も明黄褐色細砂で化粧が施され、土塁15まで広がる。非常に丁寧かつ堅牢な造りで整地層の法面を整えている。

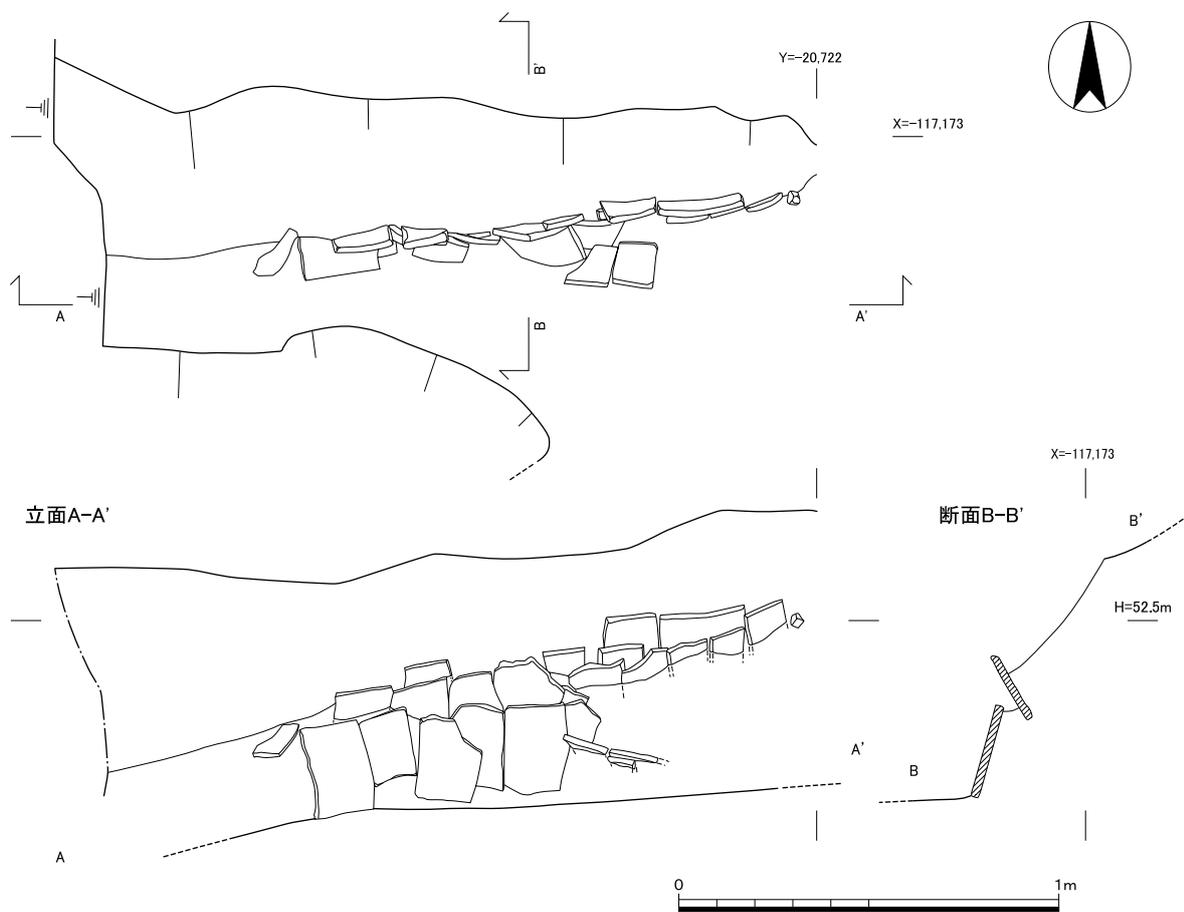


図13 1区瓦列10実測図（1：20）

法面14 (図11・12、図版2) 法面13の下層で、非常に固く締まる別の法面14を検出した。表面は赤褐色細砂で化粧されている。斜面の角度は45度である。断割り断面での観察から、この法面は法面13から0.2～0.4m東へ後退した位置にある。法面13とは別時期のもの、あるいは法面13を構築する際の一工程とも考えることができる。

瓦列10 (図13、図版2) 調査区中央部、土塁12の裾部で検出した。東西1.5mの範囲内に平瓦を縦にし、少なくとも10枚以上を東西横一列に並べ、法面13から続く平坦面上に据えている。一部は2段に積んでいる状況がみられた。転がり落ちた状況の平瓦も6枚あり、合計27枚の平瓦を検出した。中には側面に金箔の施された熨斗瓦もあった。掘形が確認できないことから、法面表土の崩落防止か、何らかの目印として土塁構築時に意図的に埋められたものと考えられる。

(3) 2区の遺構 (図14～19、図版3～5)

2区では、大規模な建物の一部と考えられる南北柱穴列や、礎石建ち総柱建物1棟を検出した。また、井戸を1基検出した。以下、主要な遺構について述べる。

土坑2 調査区北東部で検出した。径約0.7mの円形土坑で、深さは0.1mで底面の標高は54.8m。埋土は炭を多量に含む暗褐色砂泥で、京都XI期古段階に属する土師器皿などが出土した。

土坑91 調査区北東部で検出した。長径約0.8m、短径0.5mの楕円形土坑で、深さは0.34m、底面の標高は54.6m。埋土は明褐色砂泥で、京都XI期中段階に属する黄瀬戸鉢が出土した。

建物1 (図16～18、図版4) 調査区中央部で柱穴を18基(柱穴106・74・92・49・7・52・104・15・55・53・16・105・58・100・18・64・26・22)検出した。復元すると南北4間、東西4間以上の総柱建て建物となる。柱間は南北間が1.97mの等間隔である。東西間の柱間は西側2間分は1.97m間隔、東側2間分は1.45m間隔である。この建物は京間の1間(6尺5寸=1.97m)が強く意識されていることがわかる。建物の傾きは北に対して4度東に振れる。各柱穴は一辺0.4～0.8mの隅丸から楕円形を呈し、深さは0.25～0.40mである。建物の外側にあたる北・東・南側柱列の柱穴は大きく深く、それに比べて内側の柱穴は小さい。すべての柱穴は平らな底面にぐり石として径5～8cmの礫を詰め込み、粘質土で締め固められていた。断面観察では、埋土は砂と砂礫が交互に層をなしており、壺掘り地業としている。柱穴105から、京都XI期古段階に属する土師器皿が出土した。

柱穴列76 (図19、図版5) 調査区東部で、同様の規模の柱穴が南北に4基(柱穴11・12・13・14)並ぶ。柱穴11は東西1.2m、南北0.9m、深さ0.9mの隅丸方形。この柱穴の埋土中層には一辺10～30cmの自然石が詰め込まれていた。下層は礫のない明褐色砂泥である。鳥文軒丸瓦の小片が出土した。柱穴12は東西1.3m、南北0.9m、深さ0.65mの隅丸方形。埋土は大きく3層に分けることができ、上層は礫を少量含む褐色系砂泥、中層は褐色砂礫、下層は赤褐色砂泥である。中層には一辺10～25cmの自然石が数石入る。柱穴13は東西1.3m、南北1.0m、深さ0.7mの隅丸方形。埋土は4層に分けることができ、上層から順に赤褐色泥砂、明褐色砂礫、赤褐色砂泥、礫を含む明褐色砂泥となる。柱穴14は東西1.2m、南北1.2m、深さ0.6mの隅丸方形。埋土は3層に分けることが

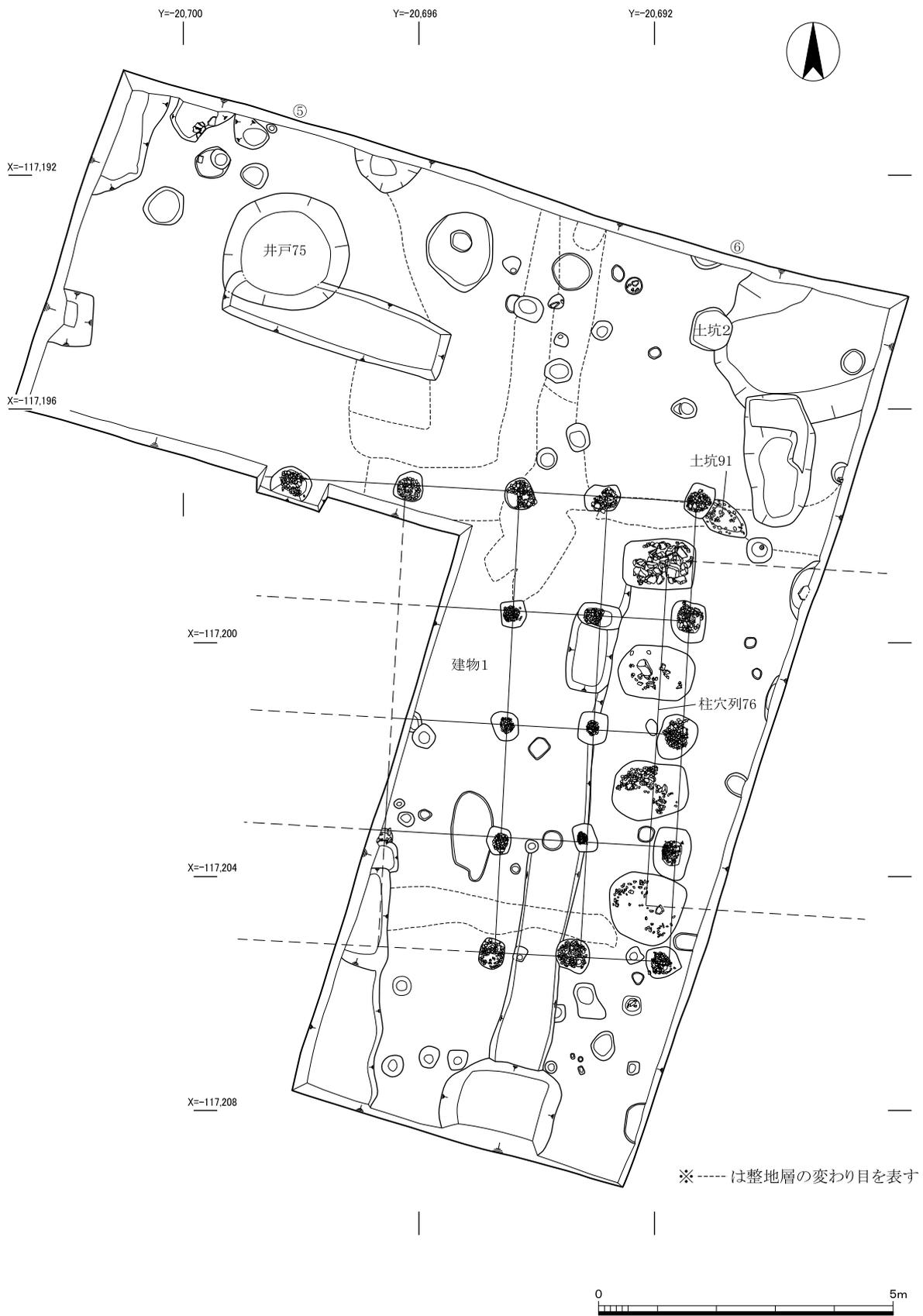
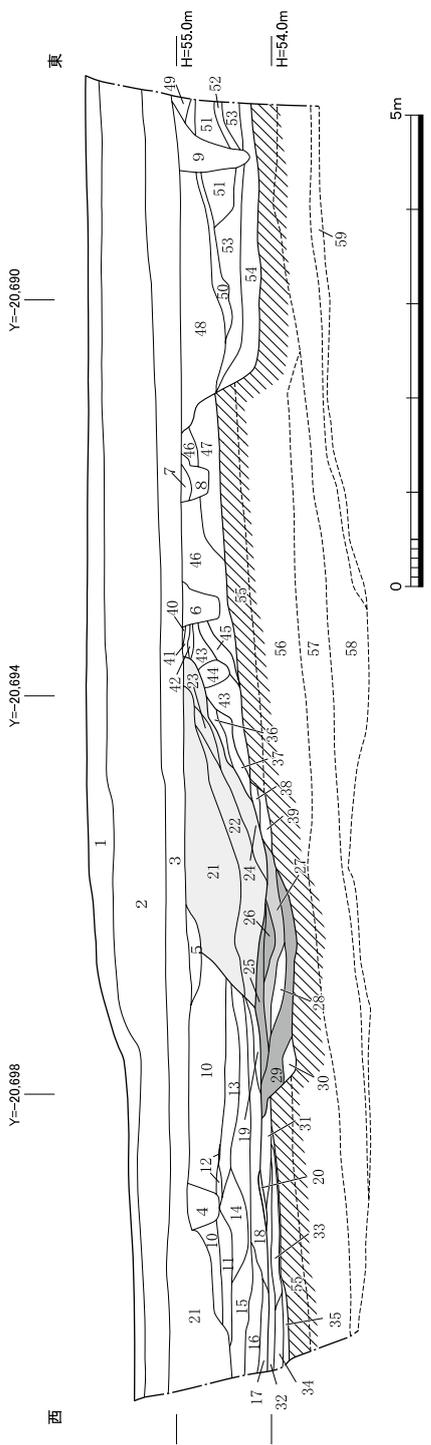


図14 2区遺構平面図 (1 : 100)



- | | |
|---|---|
| 1 表土層 | 31 2.5YR4/6赤褐色砂泥 |
| 2 10YR4/6褐色砂泥 径2~4cmの礫を含む | 32 7.5YR4/6褐色砂泥 粗砂を含む |
| 3 10YR3/3暗褐色砂泥 径2~5cmの礫を含む 土壌化している | 33 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥 径1~2cmの礫を少量含む |
| 4 10YR4/6褐色砂泥 瓦を含む | 34 5YR4/3にぶい赤褐色砂泥 径2~3cmの10YR7/1灰白色粘土を少量含む |
| 5 7.5YR4/4褐色砂泥 径2~5cmの礫を含む | 35 7.5YR5/6明褐色砂泥 径1~2cmの10YR7/1灰白色粘土・小礫を少量含む |
| 6 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥 7.5YR5/4にぶい褐色砂・径1cmの礫を含む | 36 7.5YR5/8明褐色砂泥 |
| 7 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥 | 37 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥 |
| 8 7.5YR4/4褐色砂泥 径3~5cmの礫を含む | 38 5YR4/6褐色砂泥 10YR6/3にぶい黄褐色粗砂を含む |
| 9 10YR3/4暗褐色砂泥 径5~8cmの礫・瓦・粘土塊を含む(近世擾乱) | 39 5YR4/3にぶい赤褐色砂泥 炭・小礫を少量含む |
| 10 7.5YR4/6褐色砂泥 径2~4cmの礫を含む 固く締まる | 40 7.5YR4/6褐色砂泥 |
| 11 10YR6/8明黄褐色砂泥(粘質) | 41 2.5Y7/2灰黄色粗砂 径1~3cmの礫を多量に含む(整地層) |
| 12 10YR6/8明黄褐色砂泥 | 42 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥 |
| 13 10YR5/8黄褐色砂泥 2.5Y7/2灰黄色粘土塊・径2~4cmの礫を含む 固く締まる | 43 10YR6/3にぶい黄褐色粗砂 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥・径1~3cmの礫を含む |
| 14 5YR4/4にぶい赤褐色砂泥 径3~5cmの礫を多量に含む | 44 7.5YR4/4褐色砂泥 径3~5cmの礫を少量含む |
| 15 7.5YR6/8橙色砂泥 7.5YR7/6橙色粘土粒・径2~3cmの礫を含む | 45 5YR4/3にぶい赤褐色砂泥 10YR6/3にぶい黄褐色粗砂を少量含む |
| 16 7.5YR4/4褐色砂泥 径1~2cmの礫を含む | 46 5YR4/6赤褐色粘質土(整地層) |
| 17 7.5YR4/6褐色砂泥 径1~2cmの礫を少量含む | 47 5YR4/4にぶい赤褐色粘質土(整地層下層) |
| 18 7.5YR5/6明褐色砂泥 径2~5cmの礫を少量含む | 48 10YR4/4褐色砂泥 径5cmの礫を含む |
| 19 7.5YR5/8明褐色砂泥 径1~2cmの礫を少量含む | 49 10YR4/6褐色砂泥 2.5Y5/6黄褐色細砂を含む |
| 20 10YR5/4にぶい黄褐色粗砂 | 50 10YR6/8明黄褐色砂泥 径1~2cmの2.5YR6/8明黄褐色粘土を含む 固く締まる |
| 21 10YR5/6黄褐色砂泥 径3~6cmの10YR7/1灰白色粘土・径1~2cmの礫を多量に含む 固く締まる | 51 7.5YR5/8明褐色砂泥 径5~8cmの2.5YR7/3残黄色粘土・径2~4cmの礫を含む 固く締まる |
| 22 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 径1~2cmの2.5Y6/4にぶい黄色粘土・径2~4cmの礫を多量に含む 固く締まる | 52 2.5YR7/3残黄色粘土 7.5YR5/8明褐色砂泥・径1~5cmの礫を含む 固く締まる |
| 23 7.5YR4/4褐色砂泥 | 53 7.5YR5/6明褐色砂泥 炭を含む |
| 24 7.5YR4/6褐色砂泥 小礫を多量に含む | 54 5YR5/6明赤褐色砂泥(粘質)下部に黒色のラインが入る |
| 25 10YR5/6黄褐色砂泥 2.5Y6/3にぶい黄色粘土・径1~2cmの礫を多量に含む 固く締まる | 55 5YR3/6暗赤褐色粘質土(地山1)56が土壌化して変色 上面に10YR6/2灰黄褐色砂泥のラインが入る |
| 26 7.5YR4/4褐色砂泥 2.5Y7/2灰黄色粘土を少量含む | 56 5YR4/8赤褐色粘質土(地山1) |
| 27 10YR5/8黄褐色砂泥 2.5Y6/3にぶい黄色粘土を含む | 57 7.5YR5/6明褐色砂泥 径2~3cmの礫を少量含む 固く締まる(地山2) |
| 28 7.5YR4/4褐色砂泥 | 58 7.5YR5/8明褐色砂泥 径2~5cmの礫を含む(地山3) |
| 29 7.5YR5/6明褐色砂泥 径1~4cmの礫・炭を少量含む | 59 10YR5/8黄褐色砂泥(地山4) |
| 30 7.5YR4/6褐色砂泥 | |

図15 2区北地区断面図 (1:80)

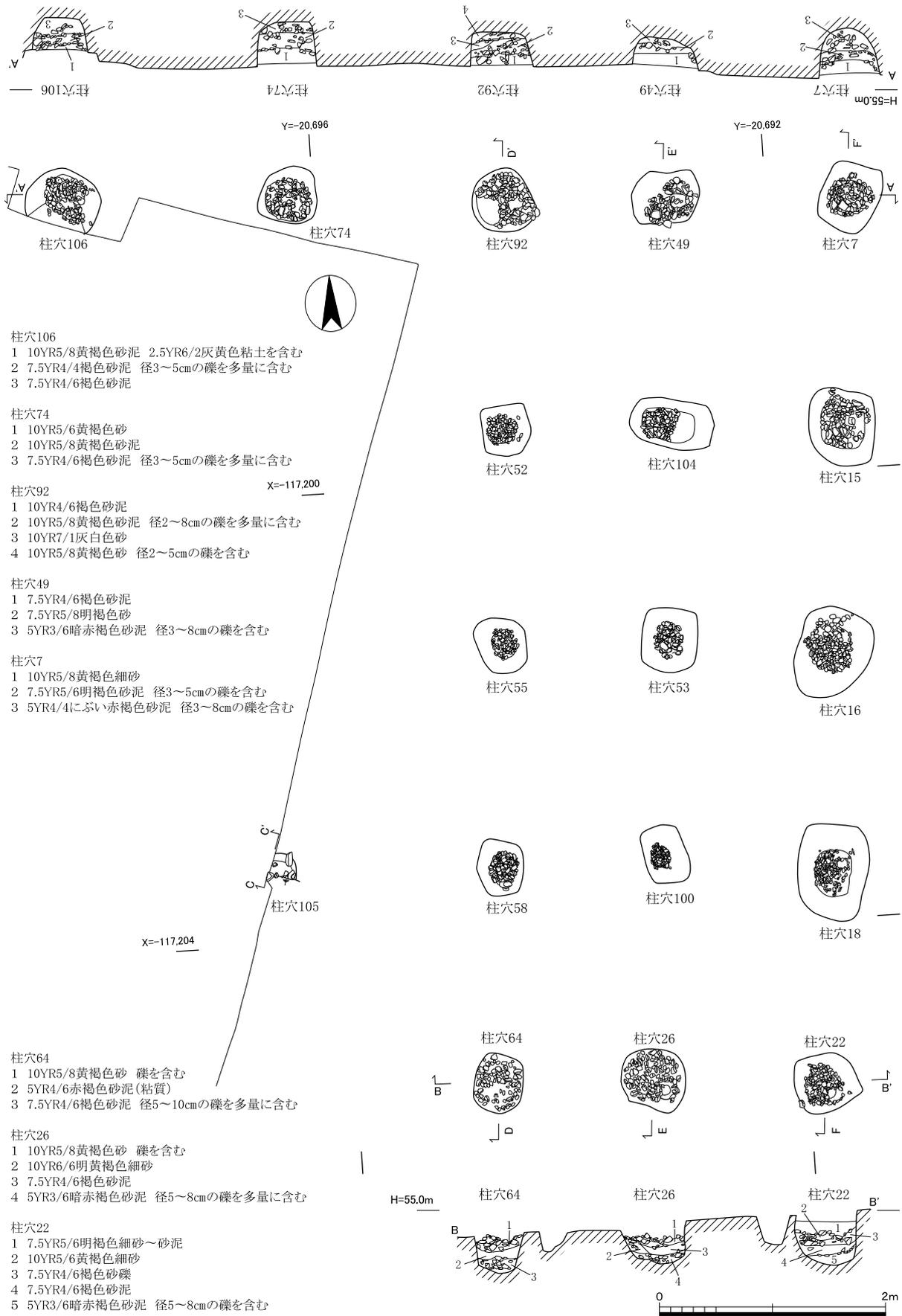


図16 2区建物1実測図1 (1:50)

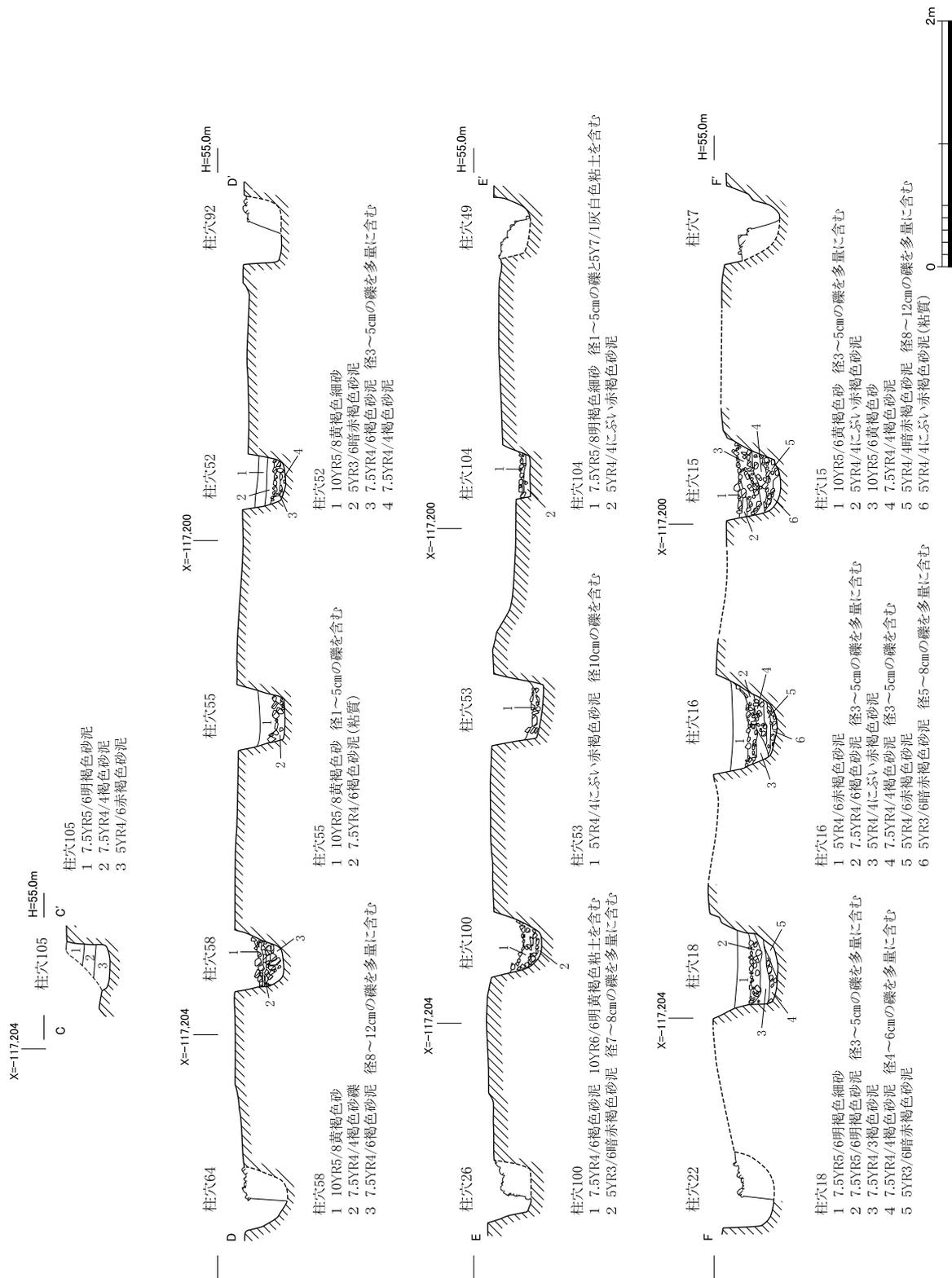


図17 2区建物1実測図2 (1:50)

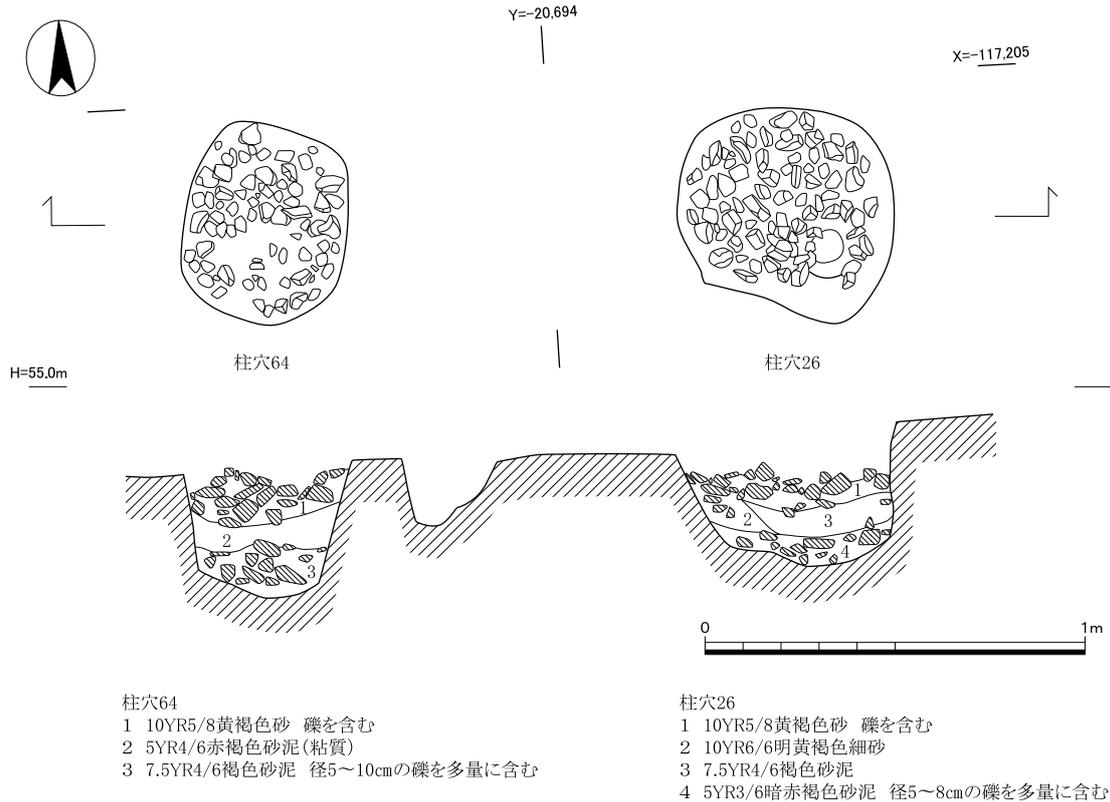


図18 2区建物1 柱穴26・64実測図(1:20)

でき、上層は明赤褐色泥砂、中層は明褐色砂礫、下層は明褐色砂泥である。中層には一辺10~20cmの自然石が数石入る。以上のように、これら4基の柱穴の埋土には礫層と砂泥層が交互に入っていることから、一種の壺掘り地業と考えることができる。4基の柱穴の主軸線は北に対して3度東に振れる。また、各柱穴の心々の距離は約2.0mで、京間の1間に近い。これらのことから、この4基の柱穴は礎石建ち建物の柱穴の基礎と考えた。しかしながら、調査区内では対となる遺構はみつからなかったため、東側(調査区外)へ展開する建物として捉えている。なお、柱穴列76と建物1は重複しているため、時期差があることがわかるが、相互に切り合う箇所がなかったこと、時期を判定できる遺物が少ないことから、建物の新旧関係はわからなかった。

井戸75 調査区西部で検出した。掘形は円形で、径約2.0mの素掘りの井戸である。検出面から深さ1.9m(標高52.9m)まで掘り下げたが底面まで到達せず、作業の安全対策上、掘り止めた。埋土は礫を多く含む褐色系砂泥層で、伏見城期の瓦類が出土した。

整地層(図15、図版3) 東半部では、整地土は主に赤褐色粘質土で形成されるが、南北に約14m(7間)の間隔をおいて、小礫を少量含む明褐色~灰黄色の粗砂層が幅約0.7mで帯状に認められる。これらの粗砂層は、断面観察で、一定単位の整地層の間に挟み込まれていることがわかった。粘質土との間に粗砂層を設けることで、水分を逃したり、土滑りを防ぐ効果があると考えられる。この粗砂層は、平面では帯状または十字状となって現れることから、この層が、工程の単位、または作業の単位なども兼ねている可能性もある。

西半部では、整地土は黄褐色砂泥に灰白色粘土と礫を多量に含む固く締まった層が中心となる。

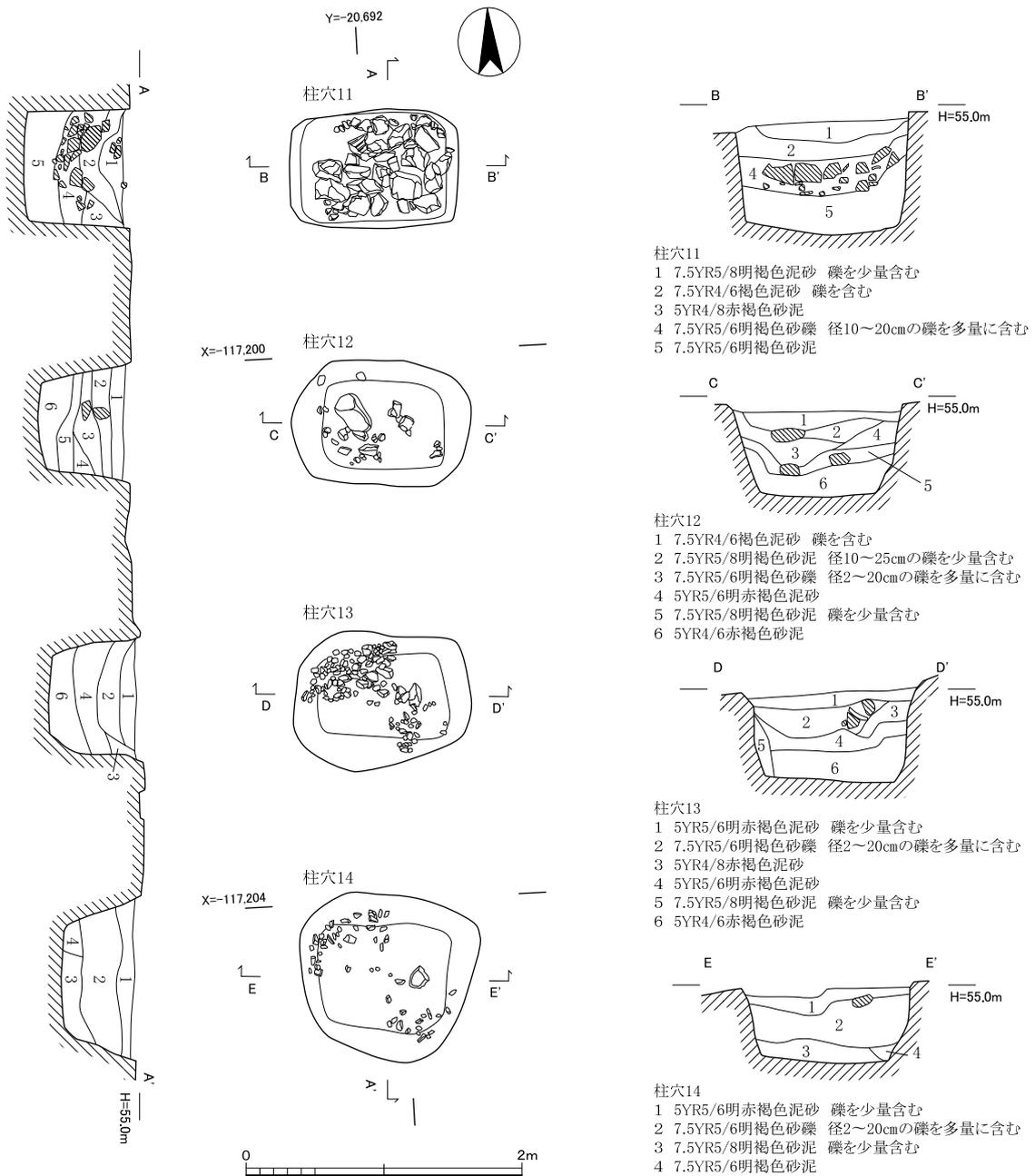


図19 2区柱穴列76実測図 (1 : 50)

しかしながら、礫層を所々に挟み込み、水抜きと土滑りに備えている。また、北壁の断割り断面で、整地造成は東から西へ段階的に行っていることがわかった。造成単位の西端部では、地山を幅約2.9m、深さ約0.4mまで掘り込み、礫層と粘土層を交互に固く積み、その上に約45度の勾配をもつ斜面を形成している。掘り込み地業による強固な地盤の上に、固く締まる傾斜面を設けて土留めとし、さらに西側に次の単位の整地土を積み上げて敷地全体の平坦面を造成したと考えられる。

なお、整地層からは京都X期新段階~XI期古段階に属する土師器皿、塩壺が出土している。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要 (表4)

調査で出土した遺物は、合計で整理用コンテナに23箱になる。出土遺物には土器類、瓦類、金属製品、石製品などの種類がある。出土遺物の多くは瓦類が占める。全体的には伏見城期の瓦類の割合が大きく、他には伏見城期の土器類、近世から近代の陶磁器が少量である。古い時代の遺物としては、平安時代中期の灰釉陶器の破片が近世盛土に混入して出土したにすぎない。なお、出土土器の年代は、京都の土器編年案¹⁾に準拠した。

(2) 土器類 (図20、図版6)

土器類には、土師器・国産施釉陶器・中国産陶磁器などがある。伏見城期のものがほとんどで、近世のものがわずかにある。極小片のため図示しなかったが平安時代の灰釉陶器が1片ある。

1区井戸2出土土器

1は輸入陶磁器で、青花碁笥底皿である。内面底部には青海波、内面に若松文を描き、体部外面には、渦巻文を連ねて文様としている。16世紀後半の明代のものである。2は美濃天目茶碗である。体部外面には回転ケズリの跡が明瞭に残る。口縁下部が肥厚気味で口縁部は小さく外反する。胎土は黄橙色で、釉はにぶい褐色に発色する。京都XI期古～中段階に属する。

2区整地層出土土器

3は歪みが大きい土師器皿である。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面とも横ナデである。口縁端部は外反気味である。胎土は軟質で内外面ともに二次的焼成を受け、黒褐色を呈する。京都X期新段階～XI期古段階に属する。4は古い特徴を有する塩壺で、下方に膨らみを持つ。口縁部は屈曲気味に直立し、肥厚した口縁上端部は平坦面となる。外面はナデ、内面には指圧痕や粘土紐の痕が残る。京都XI期古段階に属する。

表4 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
平安時代中期	灰釉陶器	0箱		少量	0箱
伏見城期 文禄元年(1592) 築城～元和9年 (1623)廃城	土師器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、道具瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、金属製品、石製品	22箱	土師器5点、国産施釉陶器4点、輸入陶磁器1点、軒丸瓦9点、軒平瓦6点、道具瓦3点、丸瓦2点、平瓦1点、熨斗瓦1点、石製品1点	1箱	18箱
近世～近代	国産施釉陶器	1箱		0箱	1箱
合 計		23箱	33点 (3箱)	1箱	19箱

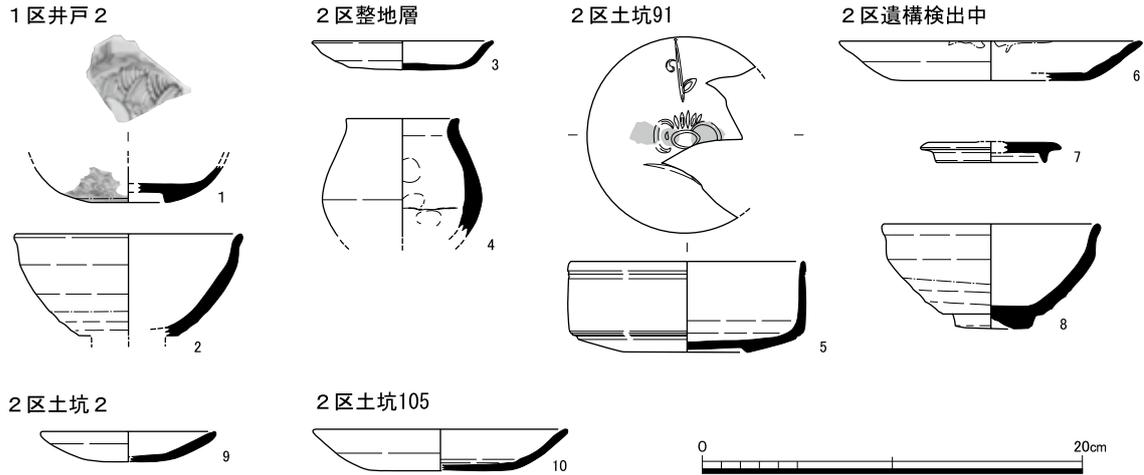


図20 出土土器実測図（1：4）

2区土坑91出土土器

5はいわゆる黄瀬戸の鉢である。底部は碁笥底高台で、体部は直立して立ち上がり口縁部に至る。口縁部は小さな玉縁状を呈する。底部外面にはロクロ目が顕著に残る。全面施釉されているが、剥離している部分が多い。わずかに残る釉は黄色～明緑灰色を呈している。内面底部には印刻で草花文が施され、その上にオリブ灰色の釉が厚く施される。京都XI期中段階に属する。

2区遺構検出中出土土器

土師器には皿がある。6は、平底で内面底部に明瞭な圏線が巡る大型皿である。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面とも横ナデである。口縁の一部内外面に煤が付着し、灯明皿に転用したものとみられる。京都XI期中段階に属する。国産陶器には、いわゆる黄瀬戸の蓋や美濃天目茶碗がある。7の黄瀬戸蓋は中央部を欠くためツマミがあったかどうかは不明である。上面全体に灰釉が施される。胎土は浅黄橙色で精良、釉は淡黄色に発色する。京都XI期古段階に属する。8の美濃天目茶碗は、ほぼ完形で、口径11.2cm、器高5.6cmで、やや小ぶりである。体部外面には回転ケズリの跡が明瞭で、底部は削り出し高台である。口縁下部は肥厚気味で口縁部は小さく外反する。胎土はにぶい黄橙色で、釉はにぶい褐色を呈するが光沢がなく透明感はない。京都XI期中段階に属する。

2区土坑2出土土器

丸底タイプの土師器小皿（9）が出土した。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面とも横ナデである。京都XI期古段階に属する。

2区柱穴105出土土器

建物1を構成する柱穴105からは、平底で底部内面に明瞭な圏線が巡る大型皿（10）が出土した。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面とも横ナデである。京都XI期古段階に属する。

(3) 瓦類 (図21・22、図版6～8)

瓦類は出土遺物の多くを占め、ほとんど全てが伏見城期のものである。2箇所(1)の井戸と各遺構から出土した。丸瓦と平瓦の小片が多くを占める。軒丸瓦18点(うち金箔の残る瓦1点)、軒平瓦14点(うち金箔の残る瓦2点)、道具瓦5点(うち金箔の残る瓦4点)、金箔の残る熨斗瓦9点があった。金箔の残る瓦は合計すると16点となる。以下に主要な瓦を中心にその概略を記す。

軒丸瓦 (図21、図版7)

11～14は右向き鳥文軒丸瓦である。11は下3分の1が欠損する。閉じた嘴、円形の目を持つ頭部と上方に広げられた6枚に分かれる羽根と単弁蓮華文状の尾を配する。瓦当部成形は瓦当裏面上端よりやや下に丸瓦を当て粘土を付加して接合する。瓦当部の接合面に横方向のナデを施す。瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデ、側面は横ナデの痕跡がある。周縁内外は磨滅により調整不明である。胎土は砂粒を含む精良な土でオリーブ黄色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は灰色を呈する。1区井戸2から出土した。

12は左半分が欠損する。閉じた嘴、円形の目を持つ頭部と下方に広げられた羽根の一部を配する。調整は磨滅が激しく不明瞭であるが、瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデ、側面は横ナデの痕跡がある。胎土は砂粒を含む精良な土で灰オリーブ色を呈する。焼成は軟質で、表面は灰色を呈する。1区遺構検出中に出土した。

13は瓦当部の一部であるが、文様は12と同文と見られ、鳥の尾の部分のみ残存する。瓦当部の接合面にカキメを施す。瓦当部裏面は平坦でナデ、側面は磨滅が激しく調整は不明である。胎土は砂粒を含む精良な土で灰オリーブ色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は灰色を呈する。なお、この軒丸瓦は周縁上面と文様凸部に金箔を施す。2区遺構検出中に出土した。

14は瓦当部の一部で、文様は下方に広げられた4枚の羽を配する。瓦当部裏面は平坦、全体に磨滅が激しく調整は不明である。胎土は砂粒を含む精良な土で灰オリーブ色を呈する。焼成は軟質で、表面は灰オリーブ色を呈する。2区の柱穴列76を構成する柱穴11埋土から出土した。

15・16は左向き鳥文軒丸瓦である。15は瓦当部の一部のみ残存する。文様は開いた嘴と下方に広げられた羽根の先端部が残存する。側面は横ナデ、周縁上面はミガキを施す。胎土は雲母を含む精良な土で灰色を呈する。焼成は軟質で、表面は灰色を呈する。1区井戸2から出土した。

16は瓦当部の下3分の1のみ残存する。文様は下方に広げられた6枚に分かれる羽根を配する。瓦当部裏面は平坦、全体に磨滅が激しく調整は不明である。胎土は雲母を含む精良な土で灰オリーブ色を呈する。焼成は軟質で、表面はオリーブ黄色、瓦当部裏面は灰色を呈する。1区井戸2から出土した。なお、図示していないが、鳥文軒丸瓦は他にあと1点あって、合計7点出土した。

17～19は右巻き三巴文軒丸瓦である。17の尾は互いに離れ、頭部は剥離しており、大きな珠文を密に配する。瓦当部成形は瓦当裏面上端よりやや下に丸瓦を当て粘土を付加して接合する。瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデを施す。側面上半は横ナデである。周縁内外は磨滅により調整不明である。胎土は砂粒を含む精良な土で浅黄色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は灰色を呈する。

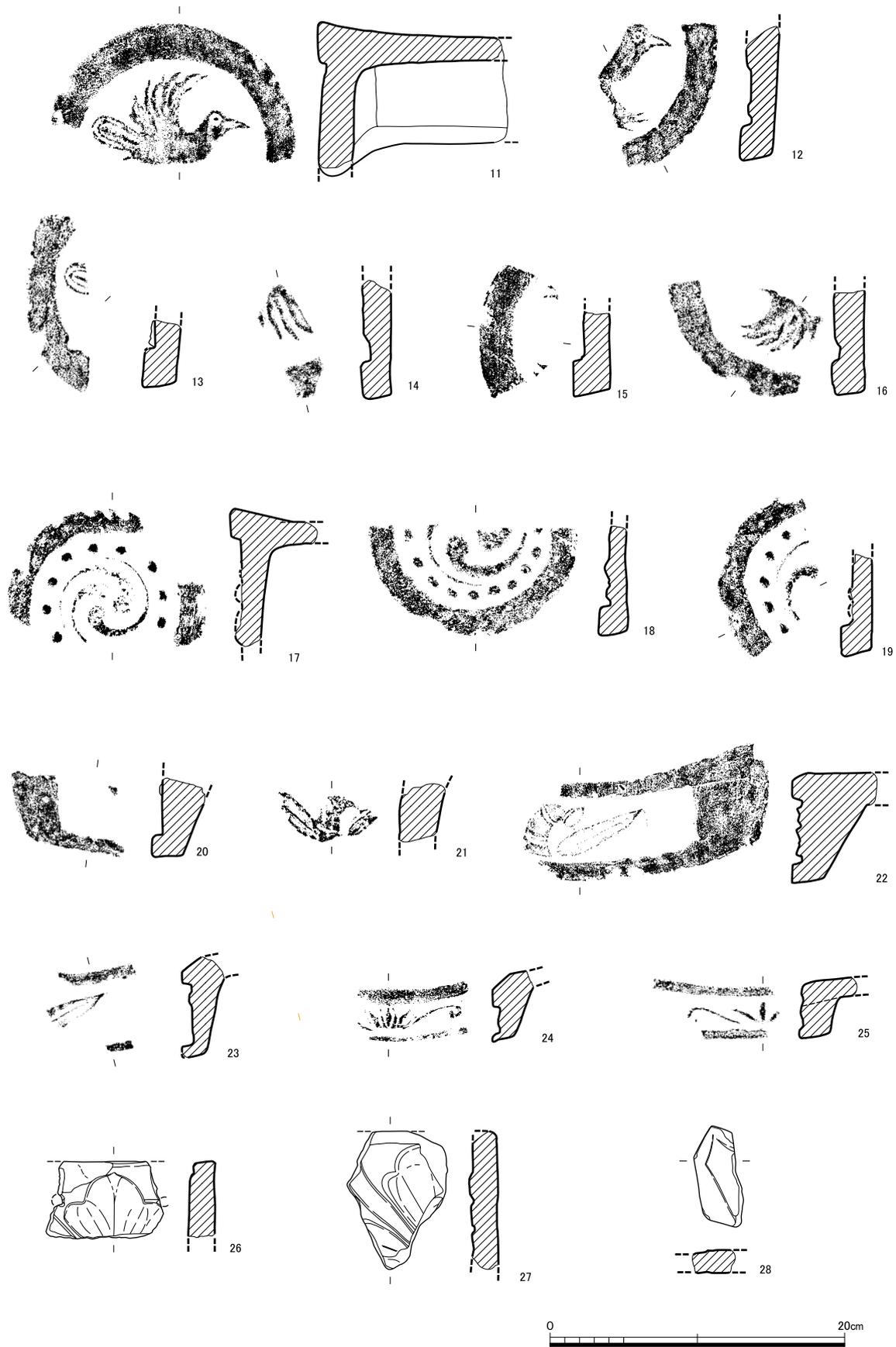


图21 出土瓦拓影·实测图1 (1 : 4)

1区井戸2から出土した。

18は上半分が欠損する。尾は互いに離れ、大きな珠文を密に配する。瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデを施す。下端に円周状のナデを施す。周縁内外は磨滅により調整不明である。胎土は砂粒を含む精良な土で浅黄色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は暗灰色を呈する。1区井戸2から出土した。

19は3分の2が欠損する。尾は互いに離れ、大きな珠文を密に配する。瓦当部裏面は平坦で不定方向のナデを施す。側面は横ナデである。周縁内外は磨滅により調整不明である。瓦当面にハナレ砂が付着する。胎土は砂粒を含む精良な土で灰白色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は灰色を呈する。1区井戸2から出土した。

軒平瓦 (図21、図版8)

20～23は大型の竹の葉文軒平瓦である。20は竹の葉の一部と周縁の一部が残存する。瓦当部は段顎で、顎部凸面は横ナデを施す。裏面・側面は磨滅が激しく調整不明である。胎土は砂粒を含む精良な土で浅黄色を呈する。焼成は軟質で、表面は灰色を呈する。1区井戸2から出土した。なお、竹の葉文様の表面、脇区、周縁には金箔を施す。

21は竹の葉文と筍文が一部残存する。筍から向かって左側にも竹の葉を配する。四周全てを欠損し、磨滅が激しいため、調整は不明である。裏面はケズリのちナデの痕跡がある。胎土は砂粒を含む土でオリーブ黄色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は灰色を呈する。竹の葉文軒平瓦の中心部の文様となると考えられる。1区遺構検出中に出土した。

22は竹の葉と筍を配する。竹の葉には葉脈を単線で表し、筍には節が2箇所ある。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凹面に顎部を貼り付けて接合する。凸面はケズリによって調整し、顎は曲線顎で幅2cmほどの面を持つ。瓦当上端の角は面取りする。胎土は砂粒を含む精良な土で灰白色を呈する。焼成は硬く焼き締まり、表面は灰色を呈する。1区遺構検出中に出土した。なお、同文の瓦が周辺の調査9で出土している。

23は22と同範瓦で、竹の葉のみ一部残存する。竹の葉文様の表面には黒漆が付着する。瓦当部は段顎で、凹面は横ナデを施す。瓦当上端の角は面取りする。胎土は砂粒を含む精良な土で浅黄色を呈する。焼成は軟質で、表面は灰色を呈する。1区遺構検出中に出土した。なお、図示していないが、竹の葉文軒平瓦は他にあと4点あり（うち漆の付着する軒平瓦は2点）、合計8点出土した。

24・25は唐草文軒平瓦である。24の中心飾りは上向き五葉で、唐草は下向きに巻き込む。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。瓦当部凹面は横ナデを施す。顎部凸部・裏面は横ナデ、周縁上面はナデのちミガキを施す。瓦当上端の角は面取りする。瓦当面にハナレ砂が付着する。胎土は砂粒を含む精良な土で灰色を呈する。焼成はやや軟質で、表面は暗灰色を呈する。1区遺構検出中に出土した。

25の中心飾りは上向き三葉で、唐草は下向きに巻き込む。瓦当部は段顎で、平瓦広端部凸面に顎部を貼り付けて接合する。磨滅が激しく調整は不明である。瓦当上端の角は面取りする。胎土は砂粒を含む精良な土で浅黄色を呈する。焼成はやや軟質で、表面はオリーブ灰色を呈する。1区井戸

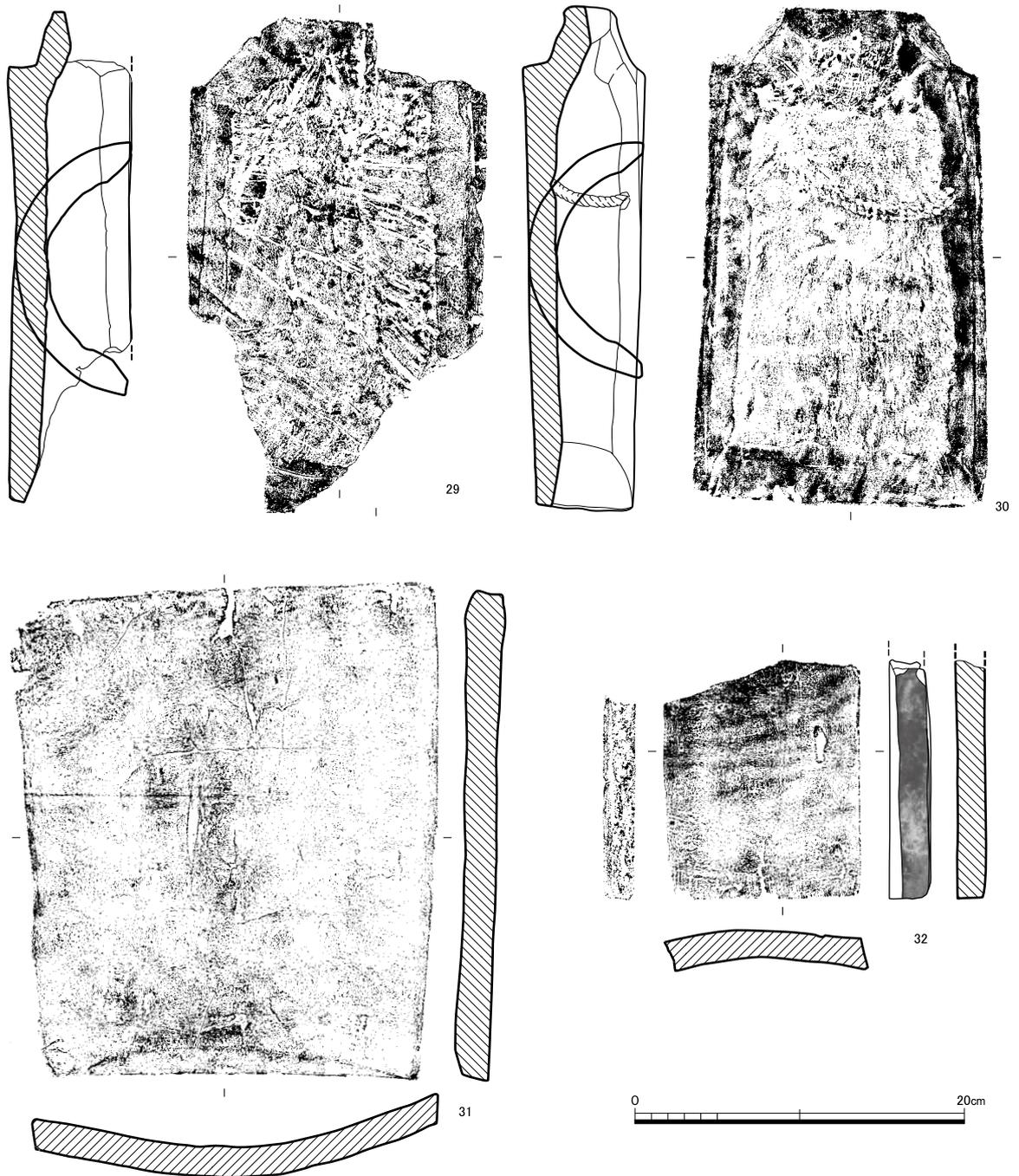


図22 出土瓦拓影・実測図2（1：4）

2から出土した。

道具瓦（図21、図版6）

26～28は板状の飾瓦の一部である。成形は范型による。剣花菱文の方形飾瓦とみられる。26には孔が穿たれる。26は1区井戸2から、27は1区遺構検出中に、28は2区井戸75から出土した。なお、27・28の表面には、一部金箔が残存する。

丸瓦・平瓦（図22、図版8）

29はほぼ完形の丸瓦で、全体の長さは30.0cm、本体部の長さは26.7cm・幅15.5cmである。玉縁取

り付き部の幅は13.0cmで、玉縁の長さは3.3cm、狭端部の幅は欠損のため不明である。成形は、粘土板1枚作りで、凹面に糸切り離し痕と布目が付く。抜き縄痕跡がわずかに残る。玉縁部端縁の内面はヘラで面取りを施す。凸面は縦ナデでヘラミガキを施す。玉縁部は横ナデである。焼成は硬質で表面は暗灰色を呈する。1区土塁の法面から出土した。

30は完形の丸瓦で、全体の長さは長さ30.7cm、本体部の長さは27.2cm・幅14.4cmである。玉縁取り付き部の幅は11.3cmで、玉縁の長さは3.5cm・狭端は8.0cmである。成形は、粘土板1枚作りで、凹面に鉄線切り離し痕と布目が残り、布には抜き縄痕跡が明瞭に付く。両側縁・両端縁の内面は丁寧にヘラで面取りを施す。凸面は縦ナデでヘラミガキを施す。玉縁部は横ナデである。焼成は硬く焼き締められ、表面は灰色を呈する。2区の赤褐色砂泥の整地層より出土した。

31は完形の平瓦で、広端幅25.8cm、狭端幅22.2cm、長さ25.9cm、厚さ1.5～2.4cmである。成形は、粘土板1枚作りである。凹面は横ナデ、両側縁部と狭端部および広端面中央部はヘラで面取りを施す。両側面は縦ナデを施す。端面もナデを施す。凸面は横ナデのち縦ナデである。なお、焼成時に砂粒より割れが生じた箇所が数箇所あり、広端部にも5箇所縦に数cmのヒビが入る。焼成は硬質で表面は灰色を呈する。1区溝1下層から出土した。

熨斗瓦 (図22、図版8)

32は熨斗瓦で、幅11.8cm、長さ14.5cm以上、厚さ1.5～1.9cmある。成形は粘土板1枚作りである。凹面は横ナデのち縦ナデ、側縁部は面取りを施す。凸面は縦ナデである。端面は丁寧なナデ。側面の一端は、丁寧なケズリである。この面には2箇所に金箔が残存している。端面側から2.0cmの間において3.3cm幅と4.0cmの間において3.0cmの幅で金箔が残る。金箔の下層には赤漆が残る。もう一方の側面は凹面側から約5mmの深さで切り込みが入る。焼成前に切り込みを入れておき、焼成後にこの切り込みに沿って割っていることがわかる。完形で出土した平瓦の半分の幅であり、製造段階から、熨斗瓦用として平瓦に切り込みを入れて焼成している。胎土は精良で灰色を呈し、焼成は硬質で、表面は暗灰色を呈する。1区遺構検出中に出土した。なお、本調査では、熨斗瓦は多数出土しており、その中でも、このように側面に金箔の残る瓦は他に8点ある。

(4) その他の遺物

金属製品

金属製品には、銭貨と鉄製品がある。鉄製品は釘などがあるが極少量である。銭貨は、2区整地層から出土した。錆びが激しく、読み取り困難である。

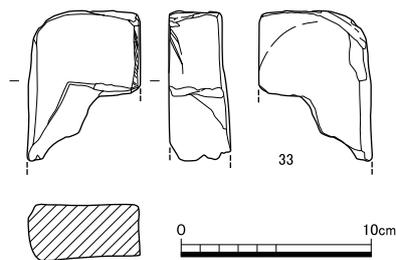


図23 出土石製品実測図 (1:4)

石製品 (図23)

石製品は砥石が2点出土したが、1点は極小片のため図示していない。33は三方を欠損しており、不整形な四角形を呈するが、元は直方体であったとみられる。平面と側面の3面は滑らかで磨滅する。石材は粘板岩で、オリブ灰色を呈する。1区井戸2から出土した。

5. まとめ

今回の調査地では、限られた範囲ではあったが、伏見城期に造成された整地層や、土塁（伏見城惣構えの一部）、そして大規模な建物遺構、井戸などを検出した。調査対象地は、元和9年（1623）の伏見城廃城以降、大きな開発に遭うこともなく、耕作土で覆われることによって、伏見城期の遺構が非常に良好な状態で残存していることがわかった。

（1）土塁と整地層について

1区では、東側（山側）でひな壇造成された整地層と土塁の南斜面を検出した。土塁は、中央部から一定の単位で順次斜めに盛土を行って構築しており、裾部では版築工法で土手を造って土留めとしている状況が認められた。また、整地層による段差斜面は土塁構築土の下層となっているが、地山上の基礎地業である明黄褐色細砂～シルトは土塁裾部から段差斜面下層まで一連に施されていることから、屋敷内のひな壇造成と同時に土塁も構築している様子が確認できた。これは、伏見城の整備が短期間で行われたことを示している。

2区では、平坦面を形成するために、東から段階的に整地を行っていることがわかった。造成単位の先端では固く締めた土で約45度の傾斜面を形成しており、その下層には掘り込み地業を行い、積み上げた土を安定させる土留めとして機能させている。また一定の単位で粗砂層を挟み込み、水抜きと土滑りを防止している。

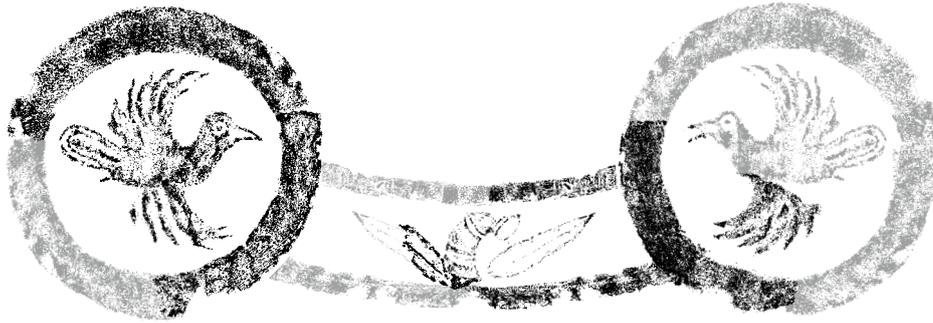
このように、土塁の裾部の版築工法による土手、整地の単位先端部の掘り込み地業、といった土木工事のさまざまな工夫がなされていることが今回の調査でわかった。

（2）建物について

建物1は、復元すると京間の1間（6尺5寸）を基本とした南北4間、東西4間以上の総柱建物となる。この建物の柱穴はすべて壺掘り地業で堅牢に造営された大型の礎石建物の壺掘り地業であると考えられ、調査区東側へ展開する建物となる可能性がある。これらの建物は重複しており、時期差があることがわかる。建物の北側で検出した井戸も建物群と同じ時期のもので一連に配置されたものと考えられる。これらの遺構群は、眺望、日当たり、通風など好条件にあり、建物の規模、造作の丁寧さなどから、伊達家上屋敷のなかでも、中心的な施設であると考えることができる。

（3）出土遺物について

遺物は近代層からの陶磁器以外は、すべて桃山時代末期から江戸時代初期に属する。2区整地層から出土した土器は京都X期新段階～XI期古段階に属する。建物1の柱穴から出土した土器は京都XI期古段階を示す。2つの井戸埋土からの出土した土器は京都X期新段階～XI期中段階のものであ



※ グレー部は反転させて復元した

図24 軒瓦葺き上げ状態復元（試案）

る。これらの中でも建物や井戸など遺物に若干の時期差が認められるが、少なくとも伏見城廃城の前後にはこの建物遺構も廃絶している。

瓦に関しては、巴文軒丸瓦・唐草文軒平瓦のほかに、鳥文軒丸瓦や竹の葉文軒平瓦が出土、中には金箔のあるもの、金箔の下地である漆の残っているものがある。竹や鳥の文様は伊達家の家紋「竹に雀文」を想起させるものがある。しかしながら、仙台城や伊達江戸屋敷の発掘調査では、家紋瓦として、「三引両文」「九曜文」は報告されているが「竹に雀文」はない。これは今後の検討課題である。

試みに、出土した鳥文軒丸瓦と竹の葉文軒平瓦を葺き上げた状態に合成復元してみると、向かいあう鳥に竹の葉と筍の文様が見えてくる（図24）。伊達家の複雑な家紋「竹に雀」を簡略化して表現したようにも捉えられる。この文様の軒瓦には金箔の残存するものがあり、伊達家上屋敷の建物の一端を示す象徴的な遺物となる。

以上のように、今回の調査では、桃山丘陵西斜面における伏見城期の整地状況、伏見城惣構えの構築状況、伊達家に関わるとみられる建物遺構の状況などを明確にするという大きな成果があった。

註

- 1) この報告では、文禄元年（1592）の築城から元和9年（1623）の廃城までの31年間を伏見城期と呼ぶ。土器編年では京都XI期古～中段階にあたる。

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080~90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580~90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃	
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV	
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

- 2) 仙台市史編さん委員会「伊達政宗文書4」『仙台市史 資料編13』 仙台市 2007年
『激動の時代「慶長」を掘る』 公益財団法人大阪府文化財センター 2012年
- 3) 山田邦和「伏見城とその城下町の復元」『豊臣秀吉と京都』 日本史研究会 2001年

参考文献

加藤次郎『伏見桃山の文化史』 1953年

小林清治『伊達政宗の研究』 吉川弘文館 2008年

江戸遺跡研究会『江戸の大名屋敷』 吉川弘文館 2011年

伊達泰宗「伊達家系譜と家紋」『伊達泰山文庫』 Vol. 1 No. 2 伊達泰山文庫事務所 1999年

伊達泰宗「伊達政宗人物史」『伊達泰山文庫』 Vol. 1 No.10 伊達泰山文庫事務所 2000年

金森安孝・渡部 紀「仙台北丸跡1次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－第3分冊 出土遺物編」
『仙台市文化財調査報告書第282集』 仙台市教育委員会 2005年

金森安孝・渡部 紀「仙台北丸跡1次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－第1分冊 本文編」『仙
台市文化財調査報告書第349集』 仙台市教育委員会 2009年

星野猷二・三木善則『器瓦録想 其の二 伏見城』 伏見城研究会 2006年

圖 版



1 1区全景（南東から）



2 1区土塁15断割り断面（南から）



1 1区法面13・14（南西から）



2 1区瓦列10（南東から）



3 1区井戸2（西から）



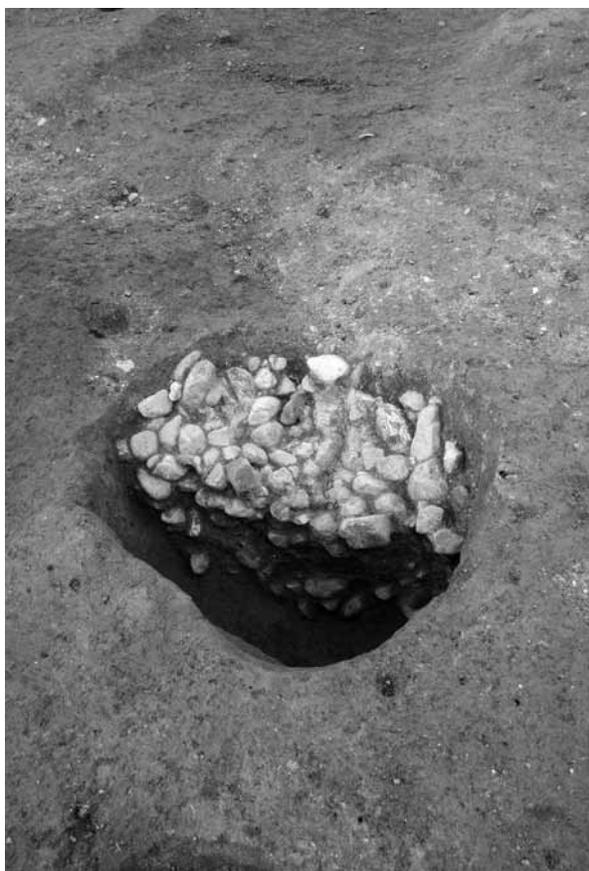
1 2区全景（北西から）



2 2区北壁断面（南東から）



1 2区建物1 (北東から)



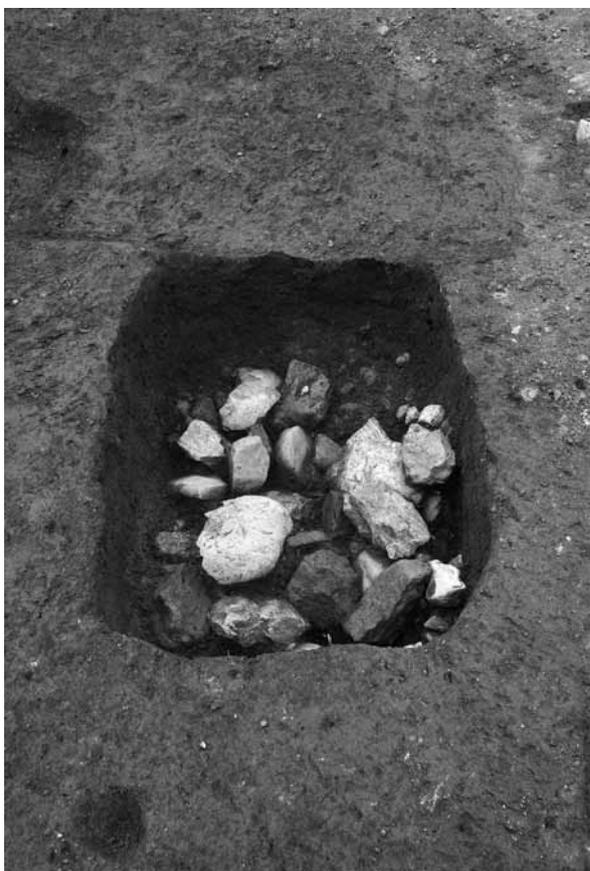
2 建物1 柱穴26断面 (南東から)



3 建物1 柱穴64断面 (南西から)



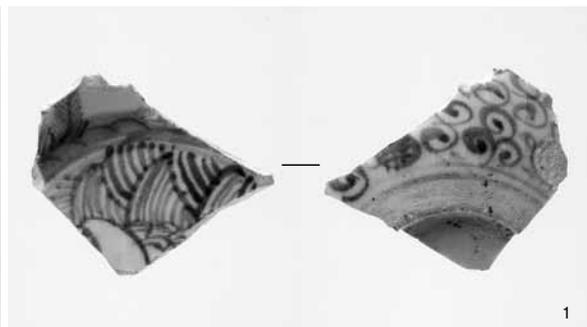
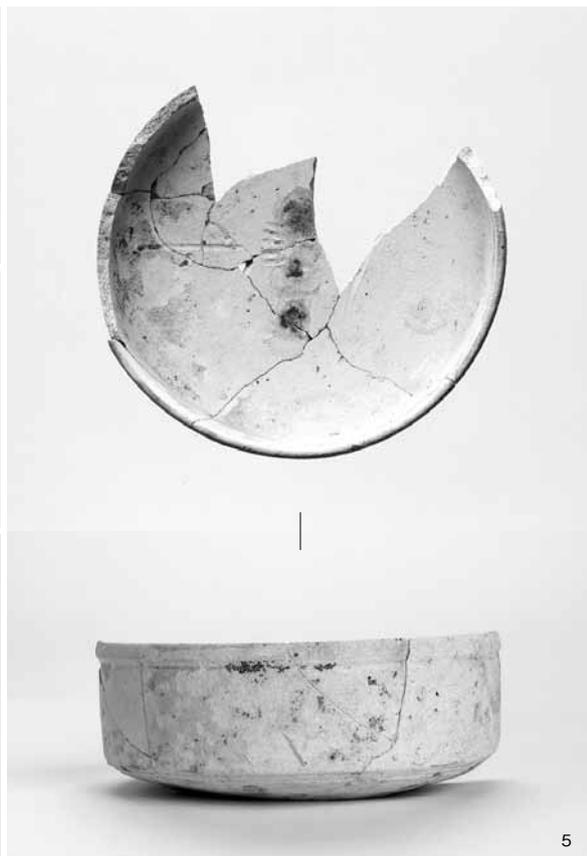
1 2区柱穴列76 (北から)



2 柱穴列76柱穴11 (東から)



3 柱穴列76柱穴13 (南西から)





軒丸瓦



軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふしみじょうあと							
書名	伏見城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-17							
編著者名	モンペティ恭代							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2013年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふしみじょうあと 伏見城跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 ももやまちょうまさむね 桃山町正宗 15-1他 地内	26100	1172	34度 56分 37秒	135度 46分 24秒	2012年11月 12日～2012 年12月15日	282㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
伏見城跡	平城跡	桃山時代末期 ～江戸時代初期	建物、瓦列、井戸、 溝、土塁、土坑、 整地層	土師器、国産施釉陶器、 輸入陶磁器、瓦類、金 属製品、石製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-17

伏見城跡

発行日 2013年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961